

## 第二十八回 すばる文学賞二次通過

### 『最後の脚本』

原稿用紙換算131枚

ナチ 著

私は眠りにつこうとしている。目は閉じられ、すつと糸が引くように意識が無くなるうとしていく。でも、いつも何かに邪魔されて眠れない……闇の世界に、あちら側に行きたいのに。

だから私は考えた。解放される方法を。でも……。私一人だけでは、眠れそうにない。

佐々木裕也は誰かの悲痛な叫び声と共に目を開けた。彼は身を起こしまわりを警戒したが、彼の耳に聞こえてくるのは机の上の携帯電話の着信音だけだった。どうやらあの声は夢だったらしい。

裕也は目をこすりながら隣で眠る理絵を起こさないようにそつとベッドを抜け出した。彼は悪態をつきながら廊下に出て、誰からも確認せずに通話ボタンを押した。

「……もしもし」

「……」

相手はしばらく何も発そうとせず、裕也の様子を伺っているようにも思えた。

それが裕也には歯がゆかった。

「もしもし」

これで無言なら切るつもりだ。

「ユウさん？」

受話器の向こうから、大人の女性のものではないやや高めの声が聞こえてきた。裕也にはそれが誰かは最初分からなかった。だがそれが彼の記憶に保存されていたある少女の声と重なった。かわいい声だね、と裕也が誉めると照れたのかしばらく何も話せなくなってしまうた、あの少女の声に。

「……ナチか」

電話をかけてきたのは裕也のメル友のナチだった。彼女は一年前にインターネットを通じて知り合った、京都に住む九歳年下の中学生。むこうはこつちを頼りにしてきて、彼にとつて妹のような存在である。実際には数回会っただけなのだが。

「久しぶりだよな、ナナから電話なんて。何かあった？」  
しばし間があった。

「……うん。ちよっと、ね」

「もったいぶるなよ。もしかして好きな奴できたとか？」

裕也の茶化しに対して、彼女はゆっくりとしかし力のこもった声で  
呟いた。

「最新のお別れに、声を聞きたくて」

「はあ？何言つて……」

電話はそこで途切れた。あとにはツーツーという機械的な虚しい、  
沈黙よりも静かな音だけが響いていた。

再び沈黙が破られたのは五日がたってからだった。引越しの荷  
物運びのバイト中だった裕也はポケットの携帯電話の鈍く低い振動  
を聞いた。裕也は段ボールの箱を地面に置くと、先輩のバイターが  
まわりにいないことを確認してから話し出す。それは知らない番号  
からだった。

彼は画面を見た瞬間ナナからだと思感じた。きつと自宅からか  
けてきているのだろう。この間は電波の調子が悪くて切れてしまっ  
たに違いない。

「もしもし？」

「あの、突然電話してすみません。高井と言います。裕也さん……  
奈々のことはご存じですよ」

相手は少女のようだった。それも、ナナの知り合いの。

それにしてもナナが直接かけてくればいいはずなのに、なんで伝  
言なんか頼むんだ？大体他人に人のケータイ番号を勝手に教えるな  
んて、なんて常識はずれなんだろう。彼はナナに対して不信感を感  
じた。

裕也の知らないところで、何かが動き出している。何かとんでも  
無いことに巻き込まれていくような気がする。それは彼の勝手な思  
いこみかもしれないが、底知れない不気味さを感じた。

「そうだけど……何か？」

相手の声は震えていた。電話の向こうでは鼻水をすする音が聞こえ  
た。泣いているようだ。後半部分は聞こえなかったが、最初の一言  
だけははっきりと裕也の耳に焼き付いた。

「ナナは、亡くなりました……」

その言葉を聞いた瞬間、裕也の頬は引きつった。この前まで自分が  
どんなに薄いつながりだとしても、関わっていた人間がこの世から  
消えたのだ。なんだろう、この喪失感。彼はふうと大きく息をつ  
いた。気分の切り替えだ。

最初の衝撃は大きかった。でも数秒立つと彼女の死を完全に受け

入れることができた。それだけちつぽけなものだったのだ。彼の心の中にいる、彼女の存在は。

これまでもメール友達と急に連絡が付かなくなったことがあった。もしかしたら自分とメールするのを厭って携帯を変えたのかもしれないし、死んでしまったのかもしれない。最初はシヨックだった。でもいつも最初だけなのだ。次第にその状態に適応し、記憶から去り、そしていつのまにかその代償が心に入り込んできている。裕也にとつてのナナなんてその代償の代償の……。数え切れないくらいだ。

そんなものなのだいつも。自分の人間関係は。彼は心の中で自分に対して冷笑的な笑いを浮かべた。

「そうなんだ…わざわざ連絡ありがと…」

「あ、切らないでください！お願いがあるんです。京都に、来てもらえませんか」

ナナは京都に住んでいたのだ。

「なんで俺が京都に……」

「ナナが、死ぬ前に私に言ってたんです。もし死んだら、あなたをここに連れて来てって」

彼女はさらに泣き出した。裕也はわざとらしいしめっぽさを感じた。この子にとつてもナナの死は数秒で乗り越えられるものなのだろうか。それを周りに悟られたくない、自分でも認めたくないから無意識に偽装してるんじゃないか？彼は映画で周りの人が泣いているのを見て白けるのと同じ種類の感情を抱いた。

「私、ナナが生きてる間何もしてあげられなかった。だからせめて今は……お願いします。交通費でもなんでも出しますから……こっちは来てください」

やめてくれ。やめてくれ……裕也はその場で頭を抱えた。なんで一人の人間がここまで執拗に関わってくるんだ。彼はその強迫から逃れるために電話を地面に叩きつけた。今頃あの少女の耳には機械的な電子音が響いているはずだろう。

携帯電話は壊れてはいなかった。でも仕事は壊れてしまった。

あの少女から電話がまたかかってくるんじゃないかと思うと気が気では無かった。だから電話の電源を切った。それでも電波という物質的な障害を越えて電話がかかってくるのではないかと不安に襲われて上の空だった。彼は現在の苦痛よりも未来の不安に怯える性格だった。学生時代も、いじめられること自体より、次に何をされるかばかり気になって恐れていた。

「おい邪魔だ気をつけろっ」

裕也より二十歳は年上の中年のアルバイトが怒鳴った。さっきか

ら何度同じ注意をされたことだろう。でも裕也にはその声は響いていなかった。彼は電話のことしか考えていなかった。ああ、かかってくるとしても、いつかかってくるか分からない……。電源は切つてあるというのに。

「明日からもう来なくていいわ」

仕事が終わりに事務所に戻ったとき、彼は責任者の女性からそう告げられた。裕也とあまり歳の違わない彼女は、ヒールの音をコソコソならしながらドアの向こうへ消えていった。彼女を見て、裕也は三つ違いの姉を思い出した。姉もああいう女なのだ。

どうやら客からクレームが出たらしい。裕也はあの後も上の空で全く仕事着手に着かなかつた。そのせいで引越し作業が予定していたよりも大幅に遅れてしまったのだつた。

彼は一人呆然と立ちつくしていた。彼の目には濃い哀愁の影があつた。

またやつてしまった。今回の仕事はたった三日間で終わりを告げた。バイトはこれで十個目。どれも一ヶ月以内でやめている。

彼は二十三歳。大学は休みがちで家にひきこもっている事が多かったが、なんとか現役で卒業した。今思えば、あれはお情けだつたと思う。職探しは自分なりに努力し、かなりの数の会社を回る事ができた。だけど不景気が自分の努力が足りないのか、どれも落とされてしまった。

そんな時、叔父から声をかけられ、彼が経営する小企業で裕也は社員として働きはじめたのだつた。でもその仕事は二週間ともたなかつた。営業、外回りが多く、精神的に疲れてしまったからだ。彼は中学時代から心を病んでいた。親には秘密で精神科を受診したこともある。

父は仕事を辞めるとき、そんな裕也をなじつた。父は大学病院の精神科の権威で、めつたに家に帰ってくることはなかつた。彼は患者が好きなのだ。子供の時から分かり合えない、なじみのない親子だつた。それでも母と姉のコンビとのつきあいよりはいくらかマシだと言えたが。

それから彼はアルバイトを始めたが結果はこの通り。いつもクビになるか、怖くて行けなくなるかのどちらかだつた。息が苦しくなつてきた。

彼はふつと悲しげに笑つと電車に乗り、帰路についた。「また辞めた」と知つたらどんなに家族は怒り、そして落胆するだろうか。いや、その心配はない。彼はここ一ヶ月、家に帰つてないからだ。

家族はともかく、自分自身が嫌だつた。もうたくさんだつた。

「消えてしまいたい……」

今から自宅と反対向きの路線の電車に乗ってどこかに失踪するのだももちろん、そんな死ぬよりも苦しい事が自分にできるはずが無かった。でもその他愛もない空想が彼を笑わせた。

目的の駅で降り、しばらく歩くとさっきまでの空想とは裏腹に、小さな古いアパートについていた。うるさく泣き叫ぶ階段を無視して裕也は登り続ける。理恵の部屋は二階の階段のすぐ傍。彼女はきつとあのドアの向こうにいるはずだ。

理恵は仕事の時の派手な格好とは対照的なラフな服装をしていた。ざつくりと編んだ白のセーターにジーンズ、彼女曰く、楽ちんルックだ。

「おかえりユウ！」

甘い声でそう言う理恵は裕也に抱きついた。だが彼の顔が暗い事に気がついて声を上げた。

「どうしたの？」

彼女は少しきつい目をしてしたが、この時はそれが精一杯優しげなものになっていた。それを見て彼の心は痛んだ。言わないわけにはいかなかった。

「バイト、首になったんだ……明日からまた仕事探すから」

「そっか」

理恵が無関心を装っている事が裕也には分かった。

「別にかまわないよ。私の仕事だけでもこの家賃払えるから」

仕事、それはいわゆるお水だった。彼女はもう何年も前からこの仕事を続けてきた。向いているのかもしれない。彼女は裕也に向かつてほほえみかけた。それを見ているとなぜか裕也はイライラしてきた。

「本当は……さげすんでるんだろ、俺の事」

自分でも驚くくらい低い声が裕也の喉元から出てきた。これまで抑圧されてきた凶暴性。そんなものが今噴出されようとしている。

彼は理恵のやわらかい腕をさつと掴んだ。

「どうなんだよっ」

理恵の唇が震えたが答えようとはしない。彼女は裕也の目をじっと見つめていた。まるで異種の生物を見るかのよう。

「なあ、言ってくれ。もういいかげん見下さないでくれ、頼むから……」

理恵は彼の目をそらした。まるで答えることを拒絶するかのよう。いたたまれなくなり、彼はアパートを飛び出した。理恵、理恵！そつ心の中で叫びながら灰色の街をすりぬけた。ジーンズのポケットには、今日までのバイト料の一万五千円が入っていた。

彼は神戸駅まで来ると迷わずに改札口まで進んだ。そしてホームま

で来ると、冷たい地面に座り込んだ。

彼の手の平には無機質な文字で「京都市行き」と綴られた切符があった……。

電車の中で彼は眠って、そして考えていた。ただ、考えていたのはナナの事ではない。理恵のことだ。

精神的な疲れから仕事をやめざるをえなくなったあの日。両親にはわがままだとなじられ、自暴自棄になって夜の街に飛び出した。確か雨が降っていたような気がする。その日は路地裏で寝た。冬の風、凍てつくような寒さ……。意識が遠のいていくのを感じた。

朝、目を覚ますと手がとても暖かだった。もう忘れていた肌のぬくもり。その時手を握っていてくれたのが理恵だった。

理恵は裕也が運ばれてきた店で働いている。ホステスだった。君あのままじゃ死んでたよ、とブラックの珈琲を入れる姿が今でも忘れられない。

それからはトントン拍子に事は進んだ。理恵は自分のアパートに彼を住ませた。私、訳ありの男が好きなんだよね、と彼女は勝手に想像して笑った。

これで良かったんだよね。いつまでも彼女の荷物になっていられない。流れゆく景色を見ながら彼は思った。

そうこの時彼は全くナナのことを考えていなかった。電車に乗ったのは理恵への思いを断ち切るため。哀しいくらい無関心さだった。

ドアが開くと彼はすぐに立ち上がり、ホームに降り立った。京都駅。さっきまで怖い存在だった携帯電話をさっと取り出すと着信履歴を見て、「あの少女」に電話をかけ直した。

少女は電話を切るとすぐに家を出たらしい。二十分足らずで裕也の元にやってきた。少女は肩に届くぐらいのつるつるとした黒髪で涼しい目元をしていた。その目には何者にも侵されず惑わされない、強い意志があった。

「良かった。来てくれないかと思っていただけ。あの時急に電話切っちゃったじゃないですか。」

「あ、ああ」

裕也は居心地が悪そうに頷いた。少女が悲しみながらも無理に笑っている様子が伝わってきたからだ。本当に悲しんでいるかどうかは、もちろん誰にも知ることはできないが、それに比べて自分なんて冷たい人間なのだろうか。

しばらく歩いてから少女は財布から一万円をだして裕也に握らせた。

「これ、今日の電車代です」

「いや、いいよ」

「そんな事言わないでもらってください。それにこのお金は、ナナから頼まれてたものなんで……」

「頼まれてた？」

裕也はおうむ返しに尋ねると彼女は表情を曇らせた。

「遺書で……自殺、だったんです」

「……」

ナナの死を伝えられた時とは違う種類の衝撃が裕也に襲いかかった。長い沈黙が二人を包む。なぜ死んでしまったんだろう。十四歳自分などとは違ってまだまだやり直しのきく年齢じゃないか。

(自分の十四歳はつらかったけどな)

「とりあえずこれは受け取ってください。ナナの願いなんで。ナナは、あなたのことが好きでした。異性として」

拒否する裕也のジーンズのポケットに少女は無理矢理札をねじ込んだ。

「じゃあ、行きましょうか」

京都駅の地下街を歩きながらその子は歩き出した。

「この街に来るのは、初めてですか？」

彼はああ、と答えた。

「神戸もハイソな感じで良い街だけど、京都も結構良いところ多いんですよ」

「俺は神戸の事もよく知らないけどな」

ただいるだけだし。裕也は誰にも聞こえない声でそう呟いた。

「あの、歴史とか好きですか？」

「ああ。昔一番得意だった」

好きではなかったが。いや、自分から何かを好きになったり興味を持ったことなんて一度もない。これからもないだろう。

裕也の心境も知らず少女は長い階段を上がり、地上へ向かった。

止まったまま動かない裕也に気がついて、その子は片足を階段にのせたまま振り向いた。長い髪が風にゆれた。

「名前、まだ聞いてなかったね。一応教えてもらえないか」

「あ、ごめんなさい。美嘉です、高井美嘉」

まっすぐに車の多い横断歩道を渡る美嘉の後ろ姿。水色のダツフルコートが暗い灰色のコンクリートにとても映えていた。裕也はその姿を見てまぶしいと思う。

自分の学生時代はああでは無かった。ただうつむいて怯えている子羊のようだった。沈黙した羊。美嘉は内気そうだが自分とは違い芯を持っているのが分かる。羊とはほど遠い……。

それにしても、ここに来て本当に良かったのだろうかと裕也は後ろをついていきながら思った。自分は生前のナナの気持ちなんて知らなかった。まさか自分のことを異性として慕ってくれていたとは思ってもしなかったのだ。

そして美嘉。自分を京都の町に連れてきて観光させてどうしようというのか。死んだナナの思い出が残る街を感じてほしいという意図なのかもしれないが、何かがおかしい。不自然なのだ。

なぜだ？自分が人間不信すぎるのか。裕也の頭の中でぐるぐると様々な思惑が湧き上がっては消えていく。

しばらくして、そんな事を考えていても無駄なのだとは彼は気づいた。どちらにせよ自分にどうこうできる問題じゃないのだ。関係ない、のだから。でも一つだけ自らつくってしまった問題がある。それは……。

理恵、ごめん。ごめん……。

あんな終わり方にしてしまっ。お礼も言えなくて。

「どこ行きます？いろいろありますけど……」

裕也が迷うとというよりも何があるかすらもあまり知らなかった)

美嘉は、

「誰か好きな歴史上の人物とかいますか？」

と観光用のマップを広げて見せる。

「人物はいないけど……明治維新前後に関係ある史跡がいいな」

瞬間、美嘉の目が輝いた。興奮しているようだ。

「え、裕也さん幕末好きなんですか？私もです！私新撰組大好きで」

「新撰組は嫌いだ」

遮るように言っ。裕也はハッとした。

「あ、そうなんですか。「ごめんなさい私ついエキサイトしちゃって」彼女はしゅんとして地面を見つめた。なんでこんな怒った言い方をしてしまったのかは自分でも分からない。

新撰組。幕末に散った勇猛な武士達。一時は京の夜を震えあがらせた恐怖の集団。でも、そんな彼らでさえ時代の波には勝つことができなかった。今でこそ人気が高いが逆賊の汚名をきせられていた彼らに、裕也は珍しく感傷を覚えるのだった。でも、どうも好きになることができないのだ。いや、新撰組に限らず、裕也は自分の命を削ってまで何かに打ち込んだ人々が好きになれない。というか、何もかも好きになれないそういう頑なな心の持ち主なのだ。

裕也が謝ると美嘉はいいんです、と言っ。ガイドブックをめくっ。た。

「寺田屋とかどうですか？」



「いいね、一回見たかったから」

「私、まだ一回も見たことないんです」

「京都人なの？」

裕也が驚いて訪ねると美嘉は意地悪！とでも言つようにならざるを向いた。

「じゃあ裕也さんも神戸大仏とか、清盛塚見に行かれたことあるんですか？」

なんだそれは。思わず言葉につまった裕也をあとにして、彼女は歩みを進める。

「裕也さん、はやく！寺田屋しまっちゃいますよ」

寺田屋は、伏見の龍馬通りという商店街の一角にあった。空はなにやら陰謀のごとく黒く曇って不気味な感じがした。せつかく入ったのに、彼は空の形相ばかり気にしていた。

龍馬が泊まって襲われただけで観光名所になるんだたら、R崎（芸能人の名）がストーカーに監禁されたホテルも百年後くらいには名所になるのかなあ。美嘉のそんな戯れ言も裕也は聞いていなかったが、もし耳にしていたら、「この子ってそんなしょうもないこと言つタイプには見えないな」と感じるだろう。

「そろそろ出ましようか」

「ああ」

相変わらず不安定な天候が辺りを支配していた。この商店街にはアーケードがない。雨が今にも降ってきてそんな雰囲気だったので、二人は足早に来るときにも通った「なやまち」という屋根付きの商店街を目指した。ここでは穏やかな音楽とアナウンスが流れていた。まるで時が止まったみたいだった。

「ところでさ」

「なんですか？」

なやまちとはうって変わって騒々しい大手筋商店街に出た二人。なやまちの続きにあるこの通りは駅前にあることも手伝って、いつもあわただしい。歩いているとかなりの確率で肩がふれ、裕也は息苦しくなった。アーケードの閉塞感がそれを増す。

「何をしに、俺を呼んだんだ」

歩調をゆるめながら息をつく彼に、美嘉は答えることができなかった。二人の間を無数の人が通り過ぎていく。うとましそうに。

「こんな、観光をさせるため、だけに呼んだなんてありえない」  
舌が邪魔をして、もつれてしまふがなんとか紡げた。

美嘉はうつむいて唇をゆがめた。始めて見る戸惑う様子には、駅前で見せた知的さの片鱗も見いだせない。

「……」

しばらく考えていたがためらいながら美嘉は言った。涼しくてきれいな目が灰色になる。

「黙って、ついてきてもらえますか」

そう告げると美嘉は歩き出す。太陽はとうに沈み、街は暗闇に呑み込まれそうになっていた。昼間あれだけ陽の光を浴びることを嫌っていたくせに、夜になるとなぜか不安になるのだ。心が死骸のように固くなるのが分かる。

どこに行くのか。黙っていてと言われてもそれを破って質問することはできたはずだ。元々無関心な彼だったが、今は無性に気になった。それを抑え、足を進める。

美嘉はさつき「雨が降るから」と焦って商店街に入ったにも関わらず、そこを出た。何を喋っているのか分からない連中のいる雑踏を抜け、店の光の届かない場所へと彼女は向かっていく。

風が二人の頬を容赦なく打った。彼はもう既に上がりきっているジャケットのチャックを無駄だと分かりつつもまた上げた。

もう何分歩き続けただろうか。手の冷たさが限界を超えんばかりの時、美嘉は機械的に足を止めた。ぼうつとしていた彼は少女の背中にぶつかりそうになる。

そこは民家と間違えそうなくらい小さな小さな寺だった。地面は暗くて全く見えなかつたがぬかるんでいて、寂れた様子が伝わってくる。きつと華やかなりし頃はここをたくさんの人が訪れたのだろう。裕也の眼前に袴姿や、小袖を着た男女が浮かび上がった。しかしその想像は本堂を見た瞬間に消し飛んだ。

木造の本堂はだいぶ腐ってきているらしく二人がそばを通るとギィと不気味な音がした。月明かりに照らされた壁は黒ずんで朽ち、塗装は触れるとはがれそうだった。また、屋根には所々穴が開き、名もない草が顔を出していて、見ているこちらが哀しくなってくる。

「寂しい所でしょ」

よつやく美嘉が口を開いたので裕也はこれまでの疑問をやっと表現することができた。

「ここは何の場所なんだ？なんのためにこんな所に」

「すぐに分かります」

そう言って再び歩き始める。

本堂の横を通ると風が建物を揺らすのかギシギシと不気味な音を奏でた。裕也はぞっとして唇が震えるのを感じた。不吉。不吉な予感が何かを暗示している。

前方の美嘉のダッフルコートフードのフードに手を伸ばし駆けたが、その手をポケットに強くねじ込んだ。まるで自分を罰するかのよう。

本堂から目と鼻の先には先ほどまでの狭苦しいイメージとは違って変わって開けた土地が広がっていた。月につきまとう雲が払われた時、裕也はそこが何か理解した。

「これは、もしかして」

「そう。ナナの、なんです」

ぼうぼう生えた雑草に囲まれて、その墓石はたっていた。ここには何十もの小さな墓があったが、彼はなぜかすぐに探していたものを見つけることができた。

墓地の隅の方にあるナナの墓石は直方体のものではなく、菩薩の彫刻だった。高さ五十センチほどのそれは、枯れかけた草に埋もれそうになりながらも、その姿を彼の目に焼き付ける。言葉が出ない。

美嘉はそんな彼を何も言わずに放っておいてくれた。彼女自身、言葉にできない何かがあるのかもしれない。

「随分はやく、埋葬するんだね」

ようやく緘黙から脱すると裕也は些細な疑問を口にした。

「はい。私も不思議に思っ、ナナのおじさんに聞いてみたんです……。ナナは一人娘でお父さん子だったし、かなり憔悴してて痛々しかったんですけど。そしたらもう遺骨を見たくないからって言ってました」

「見たくない？」

「とても四十九日まで悲しみと対面するのは耐えられないって。それなら、目の前から消え去ってくれた方が考えずにすむって」

（ナナ、君はパパなんて嫌いって言うてたんじゃないのか？口うるさいし、いつまでも子供扱いするから。でも、君がいなくなったことであれほど悲しんでいるんだ。どうしてそんなに早く死に急いでしまったんだ？俺は知りたい。ナナのためにも、自分のためにも）裕也らしくない思考の流れだった。彼は普段自分のことすらもどうでもいい人間だからだ。

「それにしてもなんでこんな寂しい所に。もっと広くてきれいな所があるはずなんじゃ」

手入れの行き届いていない暗い墓地。美嘉の話ではもう供養をする人のいなくなつた墓も多いという。ナナの人生の終焉の寂しさをかいま見るような気がする。

「ナナは、おもしろい子でした」

手を合わせながら静かに美嘉はつぶやいた。裕也は口を挟むことはせずに黙って話を聞いていた。

「たまに暴走して収拾着かなくなる時もあるけど、天然で、傷つきやすいと思つたらすこくずぶとくて」

普段平気そうに見えても親友を亡くした美嘉は耐えきれないほど

の重荷をこれからも背負っていくのだろう。

「ちよっと人間関係に悩んでたみたいだけど、相談にのつたらすぐに立ち直ったり、結構気分屋さんな所もあつたんです。だから、まさか自殺なんて……」

語尾が震えている。気丈な表情が崩れ、電話をかけてきたときの、哀しげな声に戻った。

「原因とか、まだ分かつてないんだ？」

裕也は彼女を刺激しないように静かに言葉を発した。

「実は、それで今日あなたを呼んだんです」

「えっ？」

さっきまで優しく二人を照らしていた月が、雲に隠される。

「どっという意味だ？」

裕也が困惑していると美嘉は

「あの、裕也さんに渡したい物があるんです」

そう言つて美嘉は肩にかけたトートバックから一冊のノートを取り出した。

「これは……」

「ナナの日記なんです。自殺の前の日の消印で私に送られてきて。受け取つて、もらえますか」

「なんで俺なんだ？それに、俺にはこんなもの見る資格なんてないから」

そう言つて裕也はノートを押し返す。

「見る資格がないのは、私の方なんです。ナナが生きている間何もできなかったから。でも裕也さんはいつもナナの光であり続けてきたから、私よりも……」

彼は手に乗つてそのノートを見つめた。

「もしかしたら、自殺の原因も分かるかもしれないのに、なんで」  
「怖かつたんです。もし自分が、つて思つたら」

その気持ちは痛いくらい伝わってくる。自殺で誰かを失うのは、ただ悲しいわけじゃない。自分のあの一挙一動が原因だったのでないかなと思うと、やりきれなくなるのだ。

「だから、裕也さんに読んでほしいんです」  
美嘉の目はうるんでいる。

彼は心から美嘉をかわいそうだと思つた。この感情は裕也にとつて久しぶりのものだった。これから彼女は何年もこんな思いを抱いて生きて行かなくてはならないのか。

それを思うとこの日記を読むことなんて軽い負担だと思えてきた。深く考えず裕也はノートを鞆にしまう。

「分かった。俺がもらっよ」  
いつもの裕也なら、俺がそんなこと知るわけ無いだろとあしらう所だが今日はなぜか違った。旅とはいえないこの小さな移動で、裕也の気持ちは徐々に変わりつつあった。彼は立ち去る寸前、穏やかな菩薩の顔を見つめた。菩薩、いやナナはほっつとした笑みをうかべた。裕也も少し優しい気持ちになった。

「わざわざ来てくださってありがとございました。ナナも……きつと喜んでると思います」

京都駅のホーム。電車が到着しますというアナウンスが聞こえてくる。

「そうだといいいね……」  
自分には何もできなかったから……。裕也はうつむいた。

特急と先頭に書かれた電車が静かにホームに滑り込んできた。雨に濡れながら。

美嘉の髪がなびいてその毛先が裕也の頬にふれる。

「お元気で」

「こちらこそいろいろありがとう」

彼女は裕也に向かって小さく手を振った。

「また遊びにきてください」

「……」

もう京都には来ることはないだろうと思っていたので正直な裕也は言葉を失ってしまった。無言で手を振り返すと座席に向かい、開いている席を探し始めた。びしょんという何かよく分からない音がしたが、彼には聞こえなかった。

扉が閉まり、景色が動いていく。美嘉が手を振っているのが見えた。だんだん速度をあげていく、この緑と融和した光の街の映像を見て、人は死ぬときこんな走馬灯を見るのかと思った。

ホームに入るまえに買った缶コーヒーをちびりちびりと飲みながら彼はその薄汚れた大学ノートを見つめた。表紙にはマジックで「雑記」と素っ気ない走り書きがしてあった。

（なんだかんだ言っつて、このノート、あの子に押しつけられた感じがしなくもないなあ。ババの押し付け合いってヤツ？）

でも見なくてはならない。ナナはなぜ死んだのかを探るため。彼女は生前、裕也に様々なことを相談していた。そのなかのどれかが原因なのか。あるいは全く別のことなのか。そうだとしたら、何が彼女の生命の火を消したのか。

またこれは彼の直感だったが、これを見ることで何かが変わる気がした。何も思わない、何も感じることでできなかった自分がここ

に来て少しだけ変化したのだ。これを見るとさらに転機が訪れるかもしれない。もっとも、この感情は読むことを怖がっている自分を奮い立たせるための物かもしれないが。

恐る恐る表紙をめくり、ばらばらと中を覗いてみる。字は汚く、ナナの精神の荒廃状況を表しているようにも見えた。また、どのページも消しゴムのかけ方が雑なせいで黒くなっていた。全ての答えがこの小さなノートにまつている。いわばパンドラの箱。最後には何が残るのか……。

裕也はノートが破れないように気をつけながら丁寧に最初のページをめくり、読み始めた。見たところ全く自殺とは関係なさそうな平凡な文章で始まっていた。最初のページに二行だけ書かれた警句以外は。

人間に何されても平気。誰も信じてないから。  
信じてるのは、自分の書く言葉だけ。

十一月三日(土)

格別に悩みがあるわけでもないが、何かが寂しい。自分を預けられる何かがほしい。心かもやもやするのだ。このもやもやを誰かに話したい。そう思ってインターネットの掲示板でメル友を募集しておいた。

変な男からのメールが来るのはもうこりこりなので女の子のみの募集にしておいた。私は男、特に大人が大嫌いだ！

男を見ると私はネットネットした粘液が体にまとわりついてくるのを意識下を感じる。それは小学生の時に見た露出狂の男に關係がある。私はその時そいつの行動の意味が分からなくてげらげら笑っていた。男の顔は赤くて、動物みたいで滑稽だったからだ。でも数年後にその意味を知って愕然とすると同時に、吐き気がした。

書いているうちにますますモヤモヤが悪化してきた。この事は思いついてはいけなかったんだ。

十一月五日(月)

学校で昼休みにメールチェックしたら何通かメールが届いていた。そのうち、三人は女の子だったが一人だけ男の人からメールが来ていた。

裕也さんっていう二十代の人。その掲示板によく書き込みしていたから名前だけは知っていた。またいたずらかと思って削除しようとしたら、そうじゃなかった。すごく真摯で心打たれるメール。「女の子のみの募集だったけどどうしても伝えたくてメールさせてもらいました。ナナちゃんって呼んでいいかな。」

……掲示板にナナちゃんが書いていた最低な男だけがこの世の男の全てじゃない。えらそうでごめん。でもこのまま一生ずっと男、人間の半分を憎み続けてほしくない。ナナちゃんはまだまだまだ若いし幸福な人生を送ってほしいから。……」

前々から裕也さんの事は気になってはいた。独特の哲学、世界観を持っている人だから。でも歳が離れているし気難しいというイメージがあつて敬遠していた。

彼の文章を読んでそのイメージが一変した。暖かくて優しい人、そう思った。

(あのメールだ！)

そう、確かに裕也はナナにそんな内容のメールを送った。でも特に意識して書いたわけではなかったからすぐに忘れてしまったのだ。それにナナは感動して日記を書いた。この落差は一体なんなのだろうか。

それから数日彼女は日記を書いていない。あつたとしても短いものばかりが目立つ。

十一月九日(金)

どうでもいいことだが私は金曜日の夕方が大好きだ。学校が怖いから。土日は休みだし、行かなくて良いから。それをミカに話すと彼女は「私も！」と共感していた。彼女と私はとても似ている。私は彼女が大好きだ。

前の続き。裕也さんにお礼のメールしたら良かったらメル友にならない？と言われた。もちろんこっちも望んでいたことだし喜んで承諾した。もつと彼のことを知りたいのだ。

彼はいかにも複雑な人生送つてますという雰囲気醸し出している。いい人ということは前の一件でよく理解したけど。あの掲示板では結構有名人で、ファンも多い。有名人と言つてもあくまでインターネット上ではあるが、そんな人とメールするのは少し緊張する。

今でもその気が抜け切れていないが、あの頃は特にそうだった。会社を辞めてフリーターというどこにも属さない人間になった。この空虚感には誰にも理解できないだろう。どこでもいいからとりあえず誰にも邪魔されない場所がほしかった。

そんな時、あの掲示板に出会った。内容は十代の悩み相談が中心だった。その悩みのほとんどが裕也にとつて取るに足らない物ばかりだった。それらは自分が乗り越えてきたものだからかもしれない。的確なアドバイスを相談者にするのがすごく喜んでくれた。やがてみんなは裕也を慕うようになっていった。それは彼にちょっとした

優越感をあたえ、有名人気分を植え付けることになる。

本題に戻ると、この日の日記には美嘉について語られている部分もあった。彼女は私のせいで自殺したのでは、と思い悩んでいた。だから美嘉についてのこの描写は彼女を罪悪感から救うだろう。

十一月十一日(日)良い日付だ

ああ、もう日曜日だ。以前はさぼると退学だと恐れていたけど今は一日くらいさぼっても平気だと思つう。高校受験もしなくていいし、こういう時私立の中高一貫校はありがたい。六年一緒だから人間関係のしがらみは数多いが。

やれ誰々が何年の時に……。過去の事いちいちこだわらないでほしい。バカみたいだ。私は暗いし人間関係に関して不器用だから特にいろいろ言われていると思つう。

ミカが羨ましい。おとなしいけど頭いいし、しっかりしている。それに偽善者ぶらないところが好きだ。私は彼女を親友だと思つている。裏切らないと分かっているから。

ナナは幸せ者だ。こんな親友もいてなんで自ら死ななければならなかったのだろうか。裕也はナナのことを警沢者だと思ひ、妬ましくも思つた。

それに比べたら自分が中学生の頃なんて人生最悪の時だ……。

十一月十四日(水)

今日もまた学校をさぼってしまった。今月でもう二回目だ。カラオケに入った後も、今頃みんな授業中なんだって罪悪感よりも自分だけ遊んでるといふ優越感の方が大きかつた。

ミカにこのことを話すとバカだと怒られた。でも一人だけ理解者がいた。裕也さんはメールでこう語りかけてくれた。いつもいつも真面目にやろつとしてたら駄目、逃げることも大事だと。

おもしろい理論だと思つう。みんな嫌な事から逃げるなつて言つはずなのに。

そうだ。たまには逃げることも許されるはずだ。そう考えると気持ちがあつても楽になつた。昔学校行きたくないつて叫んだ時親に本気で怒られてつらかつた。分かってくれたのは、裕也さんだけ。私のはあの人の哲学を尊敬している。

人に自分の意見を押しつけることは許されないと思つう。裕也さんの場合、語りかける調子だから自然に心へ入ってくるのだ。

違うんだナナ。俺は確かに意見を押しつけるつもりじゃないし、



これからもそのつもりだ。でも、自分よりも人生経験浅くてちつぽけな人間に自分の知識をひけらかして優越感を感じていただけなんだ。逃げている事を美化しているだけなんだ。

裕也は読んでいて胸が痛くなってきた。ここ何年も彼は何も感じないように努力してきた。全ての出来事が彼の体をすり抜けていった。これからももちろんそのつもりだったのに何か彼の失われた感受性を回復させようとしている。

十一月十五日（木）

裕也さんの真似をして私も簡単なホームページを作ってみた。彼は三ヶ月前に自分のページをすでに開いていて、たくさんの人がそこにアクセスしている。前まで彼が通っていた悩み相談の掲示板に集まっていた人達が流れ込んでいるせいも、毎晩かなりの盛況ぶりだ。

私の所はほとんど人が来ないし誰も掲示板に書き込んでくれない。寂しいから止めようと落ち込んでいたら裕也さんが一番乗りで書き込んでくれていた。しかも彼の所で私のページを宣伝してくれるそうだ。嬉しい……やっぱり彼は優しい人だ。

彼だけでなく彼のページも暖かい雰囲気で満ちあふれている。あの居心地の良さはどこから来るのだろうか。ページのデザインは彼の方がはつきり言って下さい。内容もそんなに変わらない。

でもこれだけは真似できないものがある。雰囲気。どうしてあんなに暖かいのかな。読んでたらね、なんか泣きそうになってくる。裕也さんがかわいそうって同情じゃなくて、不思議と涙が出てくるのだ。

一方私の所は、冷静に分析すると自分を悲劇のヒロインにして悲しんでいるだけ。他人が読むとイライラすると思う。

十一月十九日（月）

中高一貫校といえども、全員が高等部に進学できるとは限らない。今日、進学に関わる定期テストが返ってきた。

なんで？どうして。ああ、イライラする。なんのためにこれまで。

理不尽。不満。やるせなさ。

ケバケバしい奴のキンキン声。

「見て。今回のテスト全然授業聞いてなくてノートあんなに見せて貰っただけでこれ！すごいくない？」

すごいねほんとに。……おまえの化粧がな！

なんであんな私よりさぼっているふざけた奴が私より良い成績取ってるの？世の中は不公平だ。まじめにやっている人が損をし、ずるい奴だけがいい思いをする。彼らはまじめな人の努力の結果を

平気で搾取る！

みんな殺してやる。ズタズタにしてやりたい……。

遺書

勉強ができなくなった私には、存在価値なんか無い。

親が憎い期待しすぎ拘束しすぎ。

生んでくれるな。

十一月二十日（火）

昨日はすごく不毛なことをしてしまった。「死んでやるー」そう叫んでカミソリで手首を傷つけた。

コンナ方法で、死ネルワケ無いじゃないか。

せっかくこれまできれいに使ってきたこの日記にも血の痕ができた。言動がイタイ人間にはなりたくないと思っていたのに。これじゃただの「かまってちゃん」じゃないか。親にはれなかったのが不幸中の幸い。

でもユウさんにはメールで言った。ちょっと慣れ慣れしいだろうか、この呼び方。ユウさんって私より心理的悩み多いからかこの手の告白がすごくしやすい。友達に言ったら絶対引くに決まっている。「えっ」とか言っちゃってさ。

もちろんミカもそう。

誰も信じてはいけないんだよ。

で、ユウさんの話に戻るけど期待を裏切らず優しい言葉をかけてくれて嬉しかった。実は少し不安だった。自傷のこと怒られるんじゃないかってビクビクしていたから。

ナナの自殺の原因を知る上でキーポイントとなる言葉が浮かび上がる。成績と親の干渉。これが？原因は。いや、まだ分からない。ナナが自殺したのは二月なのだ。

それにしても…もし自分がナナの親だったら彼女に対して本気で怒り傷の手当てをするだろう。自分の体を傷つけて何になるんだ、と。もし親友だったらバカ！と一喝してから根本の悩みを聞くだろう。

そうしないでいいことだけ彼女に与えるのは自分が通りすがりの人間だから。希望にあふれたナナの文章はまだ続く。

十一月二十日（火）の続き

私がやめた方がいいよなんて聞くとユウさんは

「無理にやめようとするとストレスになるから我慢しないでいいよ。そんなに深い傷じゃないなら死んだり跡に残ったりしないから」

世の中にはこんな優しい人がいたんだ。私はちよつと世界が狭くなりすぎていたように思う。この世の中の汚い部分（不正や報われない努力）ばかり見過ぎていたから。

よし！今からまた勉強しよう。まだ二年生だしあと数回はチャンスがある。まだ時間はある。

裕也さん、あなたは私の光です。

十一月二十一日（水）

別に高等部に行かなくてもいいような気がする。普通科だしあそこでできない勉強って、正直全くない。

高校に行きたいという目標はあってもそこでやりたいこと、つまり目的はない。テストの結果だけが先行している。

十一月二十四日（土）

意味のない遊びを暇だからした。携帯で、自分にメールを送信してみたのだ。恋人からという設定。

「俺みたいな人間にこんな事言う資格ないのかもしれないけどナナの事愛してるって気づいたんだ。今は離れてるけどいつか暮らせる日がある」

呼んでいると赤面してきた。それにしても悲しいアソビだ。送り主は……？ある人の顔（まだ見たこと無いけど、イメージで）が浮かんだ。

この妄想癖！

十一月二十六日（月）

やっぱり私憂夜さん（この当て字はまさに裕也さんの本質を表していると言える）の事が好きなのだろうか。一人の男性として。これまでささやかな尊敬の念しか抱いていなかったのが急速な感情へと変わりつつあるのが自分でも分かる。

昔友達と一緒に恋愛小説書いて遊んでいた頃があったけど、あれほど技巧的な文章は浮かんでこない。

好き。会いたい。顔を見てみたい！

なんでこんなに陳腐な言葉ばかりなのだろうか。今までメールという手段でしか意思伝達してこなかった罰なのかもしれない。

ゴゴゴゴという何かがうねっている音。私の心の中ではそんな擬音語しか出てこない。

人間はいくら文明で隠してもこういう時に本性が出てくるのだろ

十二月二日（日）

言ってしまった！好きってことを。まだ返事はこないし、振られるかもしれないけど私の心臓はドキドキしっぱなしで引きちぎられそうほど痛い。

はやく返事こないかなあ。じつと、落ち着かずに待っている。

この頃夜一人で寝るのが寂しい。こんなこととすこく淫乱な奴のように聞こえるか？ベッド、いつもはひんやりしてて気持ちいいはずなのに最近は胸がしんしんときて泣きそうになる。

裕也さんがここにいたら暖かくてすつと眠れるだろうな。私が眠りに落ちるまでじつと見守っていてくれて。

考えた、だけでも心が落ち着いてくる。

十二月五日（水）

今日やつと返事が来た。天国か地獄か、一大決心でメールを開封したのに私は少し失望させられた。

子供扱いしないでほしかった。俺もナナちゃんの事好きだよ。これからもよろしくね、とそこには書かれていた。この好きは恋愛対象としての好きではないのだろう。

もつとストレートに言った方が良かったのか。あるいは気づいても知らないふりをしているのか。

でも優しい文面で私に好意持ってくれているのは分かる。今は友達や兄妹のような感情だけどいつかきつと結ばれる日が来るよね。気長に思っていくしかない。時間はたっぷりあるんだから。

そんなことがあったらどうか。裕也はとまどい、ジャケットの裾をいじった。彼は何かを考えるとときいつもそうするのだ。

ああ、と彼は物憂げなため息をついた。あのメールだ。夜のバイトでつかれきった後の事だった。パソコンを開けてホームページの掲示板を確認した後、彼はメールをチェックした。次々と受信される unnecessary 広告のメール。ひどいときには何十通も入ってくるが、彼は一度も受信拒否をしたことがない。何も来ないよりはマシだからだ。それに、どのみち通り過ぎていくものだから。この考え方は彼のポリシーとなっていた。

その中ですぐに目に入ったメール。それがナナからの告白のメールだったのだ。文面からは彼女の真剣さが伝わってきたが、真剣すぎて逆に冗談に思えてくるのだ。だから彼はネット上の友達として、そのメールを返した。

ナナに限らず、正直ネットで交流する人を彼はそれほど信じていなかった。彼はその中で人気者だったが、冷めた目で見てしまうのだ、彼らを。中には盲目的に自分のことを神だとか言って崇拜してくる人もいるが気持ち悪くて仕方がない。彼は誰も信じていないの

だ。

十二月八日(土)

今日はユウさんとチャットの予定だ。いつ返事が来るか分からないメールと違って、チャットはリアルタイムに文字でやりとりできるから楽しい。おすすめ音楽を教えると言ったら音楽が好きだと答えてくれた。だから今日はそれについて語ると思う。どんな物が好きなのか。はやく聞いて共有してみたい。

一方私は映画が大好きだからそれについておすすめを教えてあげるつもりだ。個人的には邦画やハリウッドよりもフランス映画の方がおもしろいと思う。裕也さんも気に入ってくれるといいのだが。でも男の人ってアクション系の方が好きそうだし、ちょっと心配でもある。早く夜になってほしい。

それにしてもホームページを持ち始めてから、他の事が手に着かなくなつた。いつ掲示板に書き込みがあるか分からないので、パソコンをしていない時も気になって仕方がない。書き込みにはなるべく早く返事をしなくてはと思うから。中には自分のページを宣伝するためだけに書き込んでくる人もいて、そういう人に対する対応とか、面倒くさい。応対に追われて日記も更新できないし。

パソコンを終えるとすぐ眼が痛い。鏡を見ると泣いた後のように赤くなつて涙が出てくる。連続三時間もやっているのだからそうなるって当然か。

本当は、ちょっとお気に入りのページをチェックするだけにしようつもりだったのに、やり出すと時間を忘れてしまうんだ。クリックするとまた新しい世界が広がるから。電源を切った瞬間、私はひどい後悔に襲われる。「また三時間もやってしまったー!」

パパはちよつとやりすぎじゃないかって機嫌が悪い。だからパパが寝た後に使うことにした。彼からすると、私はほとんどパソコンをしなくなつたように見えるだろう。

ネットやメール、もうやめたい。でもあれをやめるとこれまでネットで作り上げてきた人間関係が全部無くなってしまう。あんなにいい人たちはいない。

特に裕也さんのページに集う人は心が優しく、繊細な人ばかりだ。みんなが労りあっている。最初は意識していなかったが、彼のページにはひきこもりの人や、心の病を抱えた人がたくさん来ている。私はそうではないから、少し入っていけない面もある。特に一部の女性が自分の自殺未遂体験を自慢?しているのには、ついていけないと思った。傷の深さはどれくらい、薬の量……。私も前軽く自傷したことがあったから否定はしないけど、たくさんの人が来ている掲示板で他人にわざわざ誇示することでもないと思う。

ここでは心の病を抱えている人たちが多数派となっている。ある常連の女性などは、健常者の人たちを皮肉っぽく「向こう側の人々」と形容していた。そういう言われ方をすると、私のようなどっちつかずの人間は疎外感を感じる。心の病じゃないと、裕也さんとは通じ合えないのかなあ。それなら私も、ナツチャットモイイカモ。この心の不安定さに、病名という定義づけをしてほしい。

でもそんな風を感じさせるのは一部の人だけで、後は心の病だろうがそうでなかるうが、みんな仲良くやっている。これも裕也さんの人徳のなせる技だろう。他のメンタルサイト（心の病の人たちが集まるページのことをそう呼ぶらしい）ではこうもうまくはいかないと、他の人が書き込んでいた。やっぱり彼はすごいんだ！そんなすごい人と私は毎日メールで話しているんだ。

裕也はある悪徳精神科医のことを思い出した。大学時代、どうしても心の緊張に耐えられずに精神科を受診した。このままでは心臓が止まってしまつと本当に思ったから。そこは名医と評判でたくさんの人が来ていたが、悩みはほとんど聞いてもらえなかった。子供の時から一日中緊張して、気の休まる時がない。本で調べたが対人恐怖症かもしれない…。言いたいことはたくさんあった。医者はそれをさえぎった。

「君はしつかりしてるね。話もちゃんとできるみたいだし。中にはまともな会話もできない人がいるからねえ。病名？君の言うとおり、典型的な対人恐怖症でことになるんじゃないかな。大丈夫、対人恐怖症なんて薬ですぐ治る病気だから」

そう言つてソラナックスという抗不安剤をくれた。時計を見ると診察室に入つてから五分とたつていなかった。二万も請求された。聞くと、カウンセリング代が入っているからと無愛想な看護婦が答えた。

なんだこのもやもや感は。病院を出た瞬間、彼は薬をばらまきたい衝動に駆られた。

何が名医だこのヤブ！こんな薬なんかで症状がおさまると思つているのか！これまで十五年ずつと悩んできた。見た目は普通に見えるかもしれない。でもそれは緊張からくる震えとか赤面を隠そうとさらに緊張するからそう見えるだけなんだ…。そして余計それは悪化する。こんな薬一粒で積年の悩みを受け流された痛み。一生忘れられないだろう。

十二月九日（日）

昨日ユウさんが勧めてくれたCDをレンタルしてきた。あの人もこれを聞いているんだつて思うと嬉しくなった。この音をどんな気持ち

ちで聞いているのかな。目を閉じると、まぶたの奥で見える気がする。まだ見ぬあなたの姿が。

ユウさんの心に入り込んでると考えると嬉しくなった。

メールだけが接点というのはやっぱりいいのだ。音楽という文字以外の接点ができて嬉しかった。これで彼にまた一つ近づけた！「ユウさんの彼女になる作戦（勝手に命名）」第一ステップだ。

精神科の受診は裕也の心を荒廃させただけだった。彼は部屋の物を破壊した。壁に大穴を開けた。これまでいろんな療法を試して回ったけどもう駄目だ……。今思えば、もつと続けていればある程度の効果得られたのかもしれない。でも、あの頃の自分は苦しくて、とりあえず今ある苦しみをなんとかしてほしかった。即効性を求めて回った。新興宗教に入って、街で緊張に耐えながら募金を求めたこともある。通りがかりのおじさんが「宗教か？」と聞いてきたが、裕也は違うと嘘を付いた。

「そうか、ならいいんだ。自分はもう三月しか生きられないから」と言つて箱に一万円を入れたおじさんは、細い背中を丸めながら街に溶けていった。

すぐに脱会した。言つとおり募金を求めても全然症状良くならなからだった。

彼の心はぼろぼろだった。頼るべき存在は親しかいなかった。もう親に話すしかない。父はまた仕事で家に帰っていなかった。精神科医……あんな薬渡すだけのインスタント診療でいいなら、裕也も父の後を継げるかもしれない。

深夜一時、母と姉を部屋に呼びつけた。姉は自由な時間を邪魔されてぶつくさ言っていたが、それでも大事な話なんだというところ「すこやっってきた。」

彼は二人の目、見ることができなかった。彼は喉の奥が焼け付く音を聞いた。泣きそうだ。でも絶対に泣かない。

「これまで隠してきたけど俺……対人恐怖症だったんだ……」しんとなった。拒絶されるかもしれない。そんな弱い子供に育てたつもりはないと。

だが次の瞬間予想とは全く違う反応が返ってきた。二人とも大笑いしやがったのだ。

「まつさつかー！おまえが病気？」

シヨックのあまり、裕也の耳には母親がマッカーサーと言つたように聞こえた。

「八八、こんなに普通なのに。そりゃ最近ちょっと荒れてたけどあ」

「この前も電話で陽気に話してたやん」

「それは……っ」

裕也は立ち上がったって叫んだ。目の奥が熱くなってくるのを感じた。声はかすれてその反動で涙が出てきそうになった。泣くな、泣くな！「これまで十年間、ずっと緊張してて……それをこまかすために、わざと陽気にふるまってただけなんだっ。もう、本当は、ボロボロなんだ……」

最後は切れ切れだった。誰にも分かってもらえない。二十四時間、ずっと気を張りつめていなければならなかったこの苦しみ、辛さ……それを一笑に付されたのだ！存在を否定されたのと同じだ。おまえらもあの医者と同じ……こんなのなら、拒絶された方がまだマシだ……。

裕也の心の底からのSOSを感知してか、母親だけは心配そうな顔に変化した。彼女は泣いた（俺の方が泣きたいと裕也は思った）。目尻のしわがまた増えていた。老いは残酷だ。母親はなんでこれまでもずつと言ってくれなかったの……そっちの方が悲しいとすすり泣いた。

ずるい方法だ。みんな泣いてキャラにしようとするのだ。

姉はリビングで分厚い電話帳らしき物をガサゴソといじくっていたが、それを持ってまた戻ってきた。

「あなたの苦しみは分かったよ。ここに行ってみたら？」

電話帳の二百二十五ページ。彼女が指さしたその場所は、すでに今日心をズタズタに治療してくれた病院だった。

うちの家族はピントがずれている。精神科紹介する前に、それ以前に、できること、ないのか？そんなこと家族じゃなくなっちゃってできるだろう。ただ、話を聞いて欲しかった。父とはほとんど口を聞かない。小さい頃から母も、姉も、裕也が話し始めると必ず話し手の立場を奪って自分たちが中心になろうとする。雑談ってもののやり方が今でも分からないのはそのせいだろう。それに何か責められるとすぐ泣いて周りの同情をひこうとする。

十二月十一日（火）

ユウさんには前一度だけ恋人がいたらしいけど、すぐに別れてしまったと聞いた。ストイックな人だから当然女なんて知らないのだと思っていた。ところが。

いくら二十三歳でも経験したのが十五人って多すぎるんじゃないか？しかも彼女じゃ無い人と……。たとえ両思いになれても行きずりの女のお古にしかねないのか。

裕也さんは汚れてる。やってたんだ女と。

彼に対する神聖なイメージはどこかへ消えた。それどころか私まで汚らしい泥靴で汚された思いだ。汚い……この言葉が強迫的に、むしろ脅迫的に私を襲う。ユウさん……。



許せない。病氣移されて死んでしまえばいい。

雨の日も、風の日も。一秒たりとも休みなく裕也を襲うあの恐ろしい緊張症状が、「つながっている時」は1%だけ緩和されるのだ。ただ、もう一人の自分は冷笑している。通り過ぎていく人間としか接触できない自分を。

始めてできた彼女はそんな自分の心を解きほぐそうとしたが無理で、お互いぼろぼろになるくらいなら別れようと言った。悲しくもなんともない。……始めての失恋だった。

十二月十四日（木）

過去に関係した人が何人いようが関係ない。彼は彼じゃないか。私は彼がどんな人でも好きという感情は変えられないという事に気づいた。

裕也さんとの距離は果てしなく遠いけど時間だけはいっぱいある。焦ったって駄目。これからゆっくり近づいていけばいいんだ。

そう、時間だけは平等にあたえられているんだ。少しずつ関係が進展していけばいい。たとえ何年かかっても。

好きという気持ちのみ貫いていけばいい。だから後のことは考えるな。考えちゃ駄目なんだ……。

（ナナ、俺は君に「死んでしまえばいい」と思われていた頃の方が正しい評価だったと思う）

ナナに限らず裕也のことを汚れないスティックな人と思う人間は多い。前に自分がよく顔を出していた悩み相談掲示板の管理人などは、「ガラスのようにとぎすまされた感受性」という修飾語を裕也の心に付けた。

そんな物は偽物なんだ！ だいたいそんな人間いるわけがないだろう。

現実の世界にいないからってネットで俺の中に清廉な人格を見いださないでほしい。俺は汚れている。歪んでいる。聖人君子じゃないんだ！ いい加減気づいてくれ。俺を透明な存在として見る方が間違っている。俺は人間だ……。

十二月十五日（金）

私はなんて優柔不断でお人好しな人間なのだろう。あれだけ怒っていたはずなのに、少しでも優しい言葉をかけられるとすぐに舞い上がってまた好きになってしまう。彼はきつと気づいていないのだろう。自分の一言が私を生かしても殺しもすることを。

十二月十七日(日)

冬休みになったら気晴らしに神戸においでよ、案内してあげるから。このメールを見た時もう死んでもいいかもと本気で思った。もちろん二人きりで会うわけではない。彼のページの常連さんばかりで集まって遊ぶんだそうだ。こういうネットを通じて知り合った人と実際に会うのは初めてなので緊張する。

予定は次の日曜。神戸まで行くのにはお金がかかるがこれまで貯めていたおこづかいを使って行こう。本当は本を買うつもりだったんだけど。

夢にまで見た裕也さん。一体どんな人なんだろう。

どうもナナの死の原因が見えてこない。彼女は幸せそのものじゃないか。

記念すべき日。日付なんか記録しないよ、覚えているから。それにそんな無機的なものなんか、私には関係ないのさ。

裕也さんに会った！これでもう夢だけの人ではないんだ。彼は触れることのできる人間なんだ。

十二時に神戸駅に行くともうすでに何人かのメンバーが集まっていた。総勢十人くらい。他の人には目もくれず憑かれたように彼だけを探していた。もしかして、ななちゃん？と誰かが私に話しかけた。ふりむくとそこには彼がいた。これまで何回この人の名を心の中で呼んだだろう。初めて声にだした。

裕也さん、と。彼は予想に反して思った通りの人だった。というのもネットの世界でのイメージは裏切られることの方が多いからだ。髪は栗色のストレートだけどふわふわした感じで、やや短い。髪よりも濃い茶色のジャケットと“don't know at all”と哲学的な事が書かれているトレーナー。そしてその細くて長い足に似合ったジーパン。決しておしゃれでかっこいいタイプの人ではないけれど、彼流の着こなしというものができていて素敵だな、と思った。

特筆すべきなのはその目。本当ならもつと輝いていていいはずのきれいな目をしているのに、そこには憂いがあった。吸い込まれそうになった、その暗い瞳は私を魅了した。

格好だけならその辺にいる男の人と全く変わらない。ただ、彼の目の暗さだけが異彩を放っていた。これまでどれだけ傷ついたらこんな目を持つことができるのだろうか。

彼のまわりにいる人たちはどこに遊びに行くかそれぞれ相談している。実際に会うのははじめてなのにもう打ち解けていた。

「はじめまして、ななちゃん。わざわざ遠くから来させてごめん。疲れた？」

私なんかを氣遣ってくれるその優しさ。自分がそれに対してなんと答えたのかは全く覚えていない。ただ声が上ずっていたことだけは記憶にある。

まず自己紹介しあつてからカラオケへ。運良く裕也さんの隣に座れた時、私は壊れそうになった。せまい部屋で彼の膝が触れた。他の人たちがノリノリで歌い始めても、私はもう夢にいるみたいで何も歌えなかった。

そんな私を心配してか「あの曲一緒に歌わない？」とまた声をかけてくれた。彼が教えてくれたおすすめの曲。この前までメール以外で唯一の接点だったあのバラード。それが今はこうして彼が傍にいるんだ。最後の歌詞を歌い終わった時、涙がこぼれそうになった。氣になったのは、向かいに座っていた同じ年くらいの女の子が泣きそうな私をキッと睨んだことだ。彼女も裕也さんに恋い焦がれているのだろうか。彼女は私や裕也さんが以前通っていた悩み相談掲示板の管理人でもある。

彼はこの場の主役で、いろんな人から話しかけられるのに、わざわざ私を座にとけ込めるようにしてくれた。ネットやメールと全く変わらない優しさ。そして暖かい笑顔。

唐突だが、私はこれまで病的なくらい外見に関してコンプレックスを持っていた。自分の顔を見られるのが嫌で帽子を目深にかぶって街を歩いたこともある。でもあの時はそんなことをすっかり忘れ去っていた。逆に自分をアピールする氣持ちは湧いてきたのだ。もっと私を見て！と。

そしてカラオケから出て全員で喫茶に行き語り合った。今度は彼とは遠い席だったが、私はそれでも満足だった。彼は決して出しやばるうとはしなかった。誰かが冗談を言つて笑うと彼も笑った。でもその笑いが静まるとまたあの傷ついた目に戻るのだ。

私は傷ついた目の方が好きだなと思った。

時が過ぎるのはどうしてこんなに早いのだろうか。氣がつくともう夕方になっていた。親には美嘉と遊んでいたら遅くなつたと言いつつ訳しておいたが疑っているに違いない。これまで私が門限を破ったことなど無いのだから。

裕也はぼつと窓の流れていく景色をかいま見た。口を半分開けたまぬけな姿だった。今はどこなのだろう。全てが通り過ぎてしまつた氣がする。

彼女は恐ろしくはにかみやだった。始終うつむいていた。そして控えめに自分を見つめていたのを感じた。彼女に少し好感を抱いた。抑圧された者の目をしていた。

彼は恐れていた。自分を汚れない存在としてみられることを。

そしてもう一つ。誰かの心の中で自分の存在がどんどん大きくなっていくことを。今この日記を読んでいて現在進行形でそれを感じる。いやな予感がする。何かはまだ分からないが。

十二月二十六日（火）

最近ユウさんの様子が変だ。メールの返信も遅いし、ページの更新も全くしていない。メールの内容は相変わらず優しいけど、何か無理をしているような気がする。どうしたのかな。元氣ないのかなあ。

ああ、すごくもどかしい。はやくまた会ってなんで落ち込んでいるのか話を聞きたい。それから癒してあげたい。今の私には何もできないのが辛い。とりあえず何があったのか聞いてみよう、もしかしたら話してくれるかもしれない。力になりたい。あなたは私に新しい風を与えてくれたから。

十二月三十一日（日）

彼が元氣の無い理由が分かった。ネット上のある人物から妬まれて、ありもしない事で誹謗中傷を受けたらしい。犯人は、『桜』前に私を睨んだ人物だ。

これまで彼女の掲示板にいた裕也さんが自分のページを開設してから、その掲示板は閑散としてしまった。みんな裕也さんのページに流れていったからだ。自分に居場所が無い寂しさから掲示板を作った彼女。みんな彼女と話すためじゃなくて、裕也さんに相談するために来ていた。その事実が彼女を傷つけたのだと思う。私はネットでも相手にされない人間なんだって……。

それで怒った奴は彼に迷惑メールを送りつけたり、彼に関する嫌な噂を他の人のページで流したりして裕也さんを陥れようとした。なんて子供っぽい奴なんだろう。で、さらに何名かのバカがその噂を信じ込んで彼の掲示板に「ネットから消えろ」「死ね」なんて書き込む始末。

あの時彼女が私を憎悪の目でこちらを見たのは、裕也さんの事が好きだからではなく、私をはじめ他の人々が彼に必要以上に傾倒するのを許せなくなっただからだ。始めは『桜』だって彼を尊敬していたはずなのに。

自分の事のように腹がたった。しかもその噂っていうのがね、彼がこれまでネットを通じて出会った何人もの女性を送り狼したとかありえない内容だったから。

ネットなんて所詮仮想現実なんだから気にする必要ないよって彼に言いそうになってハツとした。それならネットを通じて出会った私の存在だって彼にとって現実じゃないということになるから。

私は生きている人間だ。同じく生きている彼に、何ができるだろう。何もできない！離れてるから……。あなたが苦しんでいるのに、私は何もできずにいるのだ。

一月一日（月）初日の出が私に少し勇気をくれた

今私が裕也さんにできること。それは本当にささいなことではない。誰も信じられなくなってる彼に、私はどんなことがあっても味方だよと伝えること。私だけは裏切らないと。

なんて軽薄な言葉だと思われるかもしれないが今この一瞬、いや未来永劫においてこの言葉にだけは嘘はない。

彼は辛い時だけに嬉しかったと言っていた。これをきっかけに少し関係が進展したかもしれない。そして俺ももしそちに何かあった時は絶対敵にならないと彼は語った。

味方になるではなく、敵にはならないと言つところかひつかかたし、誰に対しても頑なな彼らしい所だと思つたけれど私はただただ嬉しかった。

嫌われてはいないんだと言つことが。ただそれだけの事が、こんなに嬉しいなんて。この心の震えをどう表現したらいいか私には分からない。

裕也は中傷に関してほとんど動じていなかった。もちろん彼らの流す噂は嘘だ。でも……彼らが唯一、真の自分を分かってくれる奴らだつて感じた。この汚れた自分を。

一月三日（火）

またあの時みたいに集まって遊ぼうと裕也さんから誘われた。もちろん私も出席。こんな時だから人選にはかなり気を使つたらしい。三人しか誘わなかったと彼はメールで告白してくれた。その中に自分が入っていると知つた時の喜び！でも、もしかしたら三人しか誘いに応じなかつたのかなと思うと悲しかった。

四人でどこに行くか相談した。誰もカラオケとは言わなかった。三十歳くらいのようなおさんといい人が、ちょっと高いけど落ち着いていい喫茶店があると言つたので、みんなそこへ行くことにした。ユウさんはナナちゃんお金大丈夫？と気遣ってくれた。優しい……きつと中学生だしおこづかいも少ないと思ってるんだろう。そんなことは無い。うちの親戚で子供は私だけだし、おじいちゃん達がいっぱいくれるから。

そこは前とは全然違う喫茶店だった。前の所はチェーン店で安くてがやがやしていたけれど、今回のはちょっとしゃれたかんじで落ち着くのだ。店内にはさりげなくアンティークの品物が置いてあつ

て、私が大好きな雰囲気だった。よう子さんに良い店ですね、というと神戸にはこんな所結構多いのよと微笑んでくれた。

全員の飲み物が来て、会話はあまりはずまなかった。いや、前が騒がしすぎたのだ。今思うと前の裕也さんは不自然にはしゃいでいたような気がする。あの時は目も暗くなったり明るくなったり、差が大きかった。

彼はあの魅力的な暗い目のままでゆっくり話す。やっぱりこれが本当の彼だったのだ。私はなんだか嬉しくなった。決して大声で笑ったりはしなかったが、満ち足りた幸せな時間だった。美しい彼の目を自分の記憶に焼き付けようとしたが、そんなことをしたらその美しさへの冒険になるんじゃないかと恐れた。でもちゃっかり脳裏に焼き付けた。今もあの目を思い出すだけで、心が暖かくなる。

だいぶ時間がたったので、お開きになった。私以外はみんな地元の人なのでいいなあと思っていると、裕也さんがもう暗いし駅まで送っていつてくれる事になった。

真冬のせい、さすがに外は真っ暗だった。星の少ない空を見上げ、一番明るい星の場所を記憶した。そしたら家に帰った後もあれを見て、今の気持ちを思い出すことができるから。

裕也さんは無口だった。私は自然に、本当にさりげなくコートから手を出して彼の手にそっと触れた。その手は細いけど、手の平は私より大きくてひんやりとしている。彼はその手をにぎりしめてくれた。

彼は小さな声でつぶやいた。優しい声で。

「ナナちゃん、ありがとう……」

私は嬉しくなって裕也さんの腕に思いっきり抱きついた。

私は本当に死のうと思った。こんな誠実で優しい人のためなら、何度だって死ねる。

あの時、裕也は考えていたのだ。

妹がいたら良かったなあ。ナナは、恐ろしく繊細で素直な子供だ。喜怒哀楽が激しくて、ちょっと騙されやすい所もあるお人好しで。自分はひねくれてやさぐれてしまった。

そんな時、あの子みたいな妹がいたらちよつとは救われたかもしれない。姉なんかいらなかった。彼女は裕也と正反対の性格だ。明るくて、気が利いて人の上に立つタイプ。そのうえ優等生で整った容貌をしていたから、両親も彼女を愛した。彼女と裕也は理解しあうことのできない姉弟だった。小さな頃から、裕也がいじめっこに殴られて大泣きしながら帰ってくる。母親はなんでそんなに弱虫なの？男らしくないと彼をなじった。母親似の姉はやられたらやりかえせばいいのよ！私が仕返してきてあげる！と同じベクトルで憤慨

した。それを聞いて彼はまた大泣きした。けんかはもう嫌だー。な  
んでみんな仲良くできないんだよ。

彼は空き地（あの頃はまだかろうじて存在していた）に咲くシロ  
ツメグサを見つめていて、いきなり頭を叩かれた。今思い返すと叩  
いた方はきつと暇だったのだろう。何かに熱中している裕也が許せ  
なかったのだ。

でもあの時は弱い自分のせいだと思った。なんで今、どうして今  
こんな事を思い出さなくてはいけないのだろう。彼の心は冷え続け  
た。

一月七日（土）

新年オフ会（ネット上の人と実際に会うこと）をこう呼ぶのだそう（  
も無事終わり、私たちの距離も少しは縮まった。腕にも抱きつい  
ちやったし。裕也さんびっくりしてたなあ。

裕也さんからこの前は楽しかったってメールが来た。明後日から  
嫌な学校だが、裕也さんの面影を抱いて行こうと思う。

もう学校で何言われても絶対平気。私にはユウさんがいるからな。  
あの時感じたこと…裕也さんは何かを言いたそうだった。気のせ  
いだろうか。もしかして、私と同じで好きだということを伝えよう  
としたのだろうか…？まさか。でも期待してしまう自分がある。あ  
の澄んだ目に自分が常に映ってられる日がいつか、いつか来るこ  
とを。幸せ……。

どうしてこんな独白をしているのだろうか。裕也は自分の心が分  
からなくなった。

自分が中学の時はどもりに悩まされ、ろくに口を開けることがで  
きなかった。この頃から常に緊張していなければ生きていけなく  
なった。赤面も始まった。もちろん友達もできない。クラスのいじ  
めっ子どもにも悪質な嫌がらせをされたこともあった。なんとか不登  
校にはならずにはすんだがあの頃自分に自信を失った。心は完全に光  
を失い、死んでしまった。それと同時に悩んでいる自分というもの  
に新たな存在価値を見いだしていった。

それは裕也を独りよがりにした。ますます悪化していく自分の緊  
張症状。安らげる時なんて無い。緊張するなと思ったら、ますます  
体が震えるんだ。休みの日は平日の精神的な疲れからいつも眠って  
いた。誰も分かりっこないこの痛み。刺すというよりえぐられると  
いう方が近い。やがて、その持続する痛みすらも感じなくなってい  
く。

一月十日（火）

いよいよ授業が始まった。私は気分が重い。二学期もそうだった  
が、授業の間にはケータイを見ることが欠かせなくなった。待ち  
受け画面に新着メールのマークがあるとワクワクする。今日は、と  
いうよりもオフ会以来まだ返事が来ない。もうはやく送ってじゃな  
いと私の精神がもたないこんな閉塞された空間で。

高校、大学も同じ。卒業できたことが奇跡だったといえる。そし  
て、今。本来ならどこかの会社に就職して（いや、隷属か？）いて  
もおかしくない年齢だ。バリバリのキャリアウーマンで今度昇進す  
る姉は「いつまでブラブラしてんの？男のくせにだらしないな」。  
自分の視点でしか物事を考えられない人間に何が分かるというの  
だろうか。もちろん就職していない自分が世間一般的に悪いとい  
うのは分かっている。

でも、どうしたらいいんだ！こんな、一日たりとも人と接するこ  
とがすごく疲れる病んだ心の人間に。心を病んだ人間には生きる資  
格もないのか？二ヶ月だけ社員というものをやってみたことがある  
が、体中のエネルギーは枯れさせられた。枯渇。人間関係が辛いと  
かそういう次元ではなく、息も付けないくらい疲れ切ってしまった。  
むろん、ネットで知り合った人間は別だ。なんの疲れも感じない。  
彼らは通り過ぎていくからだ。

一月十一日（水）

やっとユウさんのケータイからメールが届いた。私が聞きたいこ  
とがあつて、質問したのにそれにはまったく触れられていないか  
い。そこには、何の前置きもなく、こう書き添えられていた……

「もう、俺は駄目だ」

ユウさんがこんなに平静を失った様子を、私はこれまで知ったこ  
とがない。彼に対する中傷が横行した時もこれほどまでには取り乱  
していなかった。

たとえ、ほとんどが文字のみの交流でも私には分かるのだ。彼の  
苦悩、愁い、そんな負の感情全てが。それを知った時、私はユウさ  
んを心から愛おしく思う。なんとかしてあげたくて、でもできなく  
て。その熱情が私の腐敗した退屈な日常をドラマ化してくれる。好  
き、大好き！不謹慎かもしれないが、彼のあの目といい、不幸が彼  
を魅力的にするのかもしれない。

とりあえず心配だ。あの優しすぎて自分を追いつめる人のことが。  
あなたは駄目な人間じゃない。この世でたった一人、汚れない繊細  
な心を持つて生まれてきた私にとって大事な人なんです。

ケータイに何度も電話したが、彼は決して出ることはない。何が  
起こったの？家に忘れっぱなしにしているの？それならいいけど、



もし彼が、電話を取れない状態にあるのなら……。私は不安だ。「もう駄目だ」自殺しようとしている!?まさか。嫌だ!そんな事あって良いはずがない。私は何度も、たとえストーカーだと思われてもいから狂ったように電話をかけた。どこの誰とも知らない機械的な女の声が、私の鼓膜を残酷にも震わせる。

「こちらは、留守番サービスセンターです……」

今となつてはバカなことをしたと、裕也は後悔した。だがそれを引きかけに理恵と出会うことができたのだから神に感謝しなければならぬ。彼は昔は根っからの無神論者だったが、今は神の存在について深く考えることが多くなつていた。

あの日、道で行き倒れるという最高にかっこわるい事態にもかかわらず彼女は見知らぬ自分を助けてくれた。深い絶望で終わるはずだった自分の人生を、彼女がすくい上げてくれた。

彼女は裕也の事を好きだと言つたが、愛しているとは言わなかつた。彼女は自分の欲望に正直な女。彼女のアパートに居座るようになった日の夜、彼女は自分から突然裕也の胸に飛び込んだのだ。あんなに熱情的な夜を、裕也は過ごしたことがない。忘れかけた本能が目覚めてくるのを感じた。たぶん、自分は体だけを求められているのだ。彼女の細い指は空を描いていたから。

裕也は理恵に好意を抱いていた。彼女は自分について何も聞いてこないし、干渉や同情も一切しないからだ。サバサバした女だった。少なくとも、これまで接してきた他人とは違つていた。

一月十八日(水)

私はこの一週間気が気ではなかつた。ユウさん、あなたは生きているの?何かが起こつたことは確かだ。

やつと彼からメールが来て、私は嬉しくて授業中にもかかわらず「やった!」と叫んでしまった。幸いケータイを所持していることはばれずにすんだが、数学の授業態度の点は下がつたかもしれない。

美嘉は口だけ動かして何やつてるの?と不信げに聞いてきた。彼女には裕也さんのことは伏せていたからだ。私が彼女にした初めての秘密だった。私はノートをちぎつてこれまでのことを書き記した。もう二回も会つたし、だいぶ進展してきているんだ、と。美嘉からすぐ返事が来た。

「ネットで知り合つた人でしょ? あんまり熱入れない方がいいよ……」私はむっときた。裕也さんは悪い人じゃない。そう、あんたよりもずっと私の気持ちを分かってくれるんだ。もう、美嘉には自分の内面を話さない方がいいのかもしれない。私は今自分のいるこの教室が狭くなつてきているような気がした。

授業後、中庭の木にもたれて彼のメールを読んだ。いつもよりずっと短かった。「実は、ヤケになって酒飲んでから道で倒れて死にかけてしまっ……」

私はその文面を読んだとき、胸がズシッとときしむ音がした。凍死。もし彼が死んでいたら、私も憂鬱な時期だったから後を追っていたかもしれない。生きていてくれて良かった。何も与えてくれなくていい。あなたの存在だけが私を救ってくれる。

誰の名言だっただろうか。裕也の心にふわっと浮かんできた言葉がある。

「私の領地に侵入するのは勝手だ。でも私の心を侵すことは誰にもできやしない」。あるいは自分が作ったものなのだろうか。

一月十九日（木）

はじめて今日ユウさんの電話での声を聞いた。いつでも電話してもいいよって言われてたけど、尻込みしててなかなか出来なかった。会った時よりも低くてごごごつした声で、ちよっと怖かった。

緊張して何も話せないかと思ったけど、中心にする話題はもう決めていたから、沈黙には苦勞させられることはないはずだった。

話題。それはもちろんなんでメールを頻繁にしてくれないのかって話。行き倒れて連絡できなかったのは分かっている。でも一週間もメールできないはずはないし、昨日もあれから全然メールをくれることはなかった。

ところが実際話し出すとなぜか怖くてその話題はできなかった。だから行き倒れた時の詳しい話がメインになった。裕也さんはあれから一度も家に帰ってないという。それなのに声は不自然なくらい明るくて、彼の体に別人の魂が入り込んだようだった。彼の、こんな声は魅力的ではなかった。たぶん目も同じなのだろう。

私はさらに怖くなって「どうして？」と震える声で明るさの理由を問うた。

「そのことがきっかけになって、彼女できたんだ」

ダカラ、返事遅カッタノカ。私のことなんか忘れ去られていたんだ。悟られないようにするので精一杯だった。息が苦しい。許せない。

「実は彼女お水やってた」

と、彼はそんなことなど気にもしないという風にさらりと言葉を継ぐ。

あばずれ。尻軽女。

さわらないで！

裕也さんにさわらないで！

いや、彼女がお水かどうかなんて全く関係ないよ。

裕也さんはやっぱり今も汚れてる……してたんだ女と……。私まで汚された気分だ。

一月二十日（金）

これまで恋に関わらずいろんな大変なことにぶちあたった時私はいつもプラス思考で乗り越えてきた。あきらめたら全てが終わってしまう。だからがんばるんだって。

でもどうして。裕也さんに現在進行形で恋人ができたって聞いてから、何をするのも元気が出ない。

今までしてきたことが全部無駄な事のように思えてきたのさ。もうプラス思考でどうにかなる問題じゃないんだ。人の心だけは一番変えにくい。そう、黒い霧が彼の清廉な心を包もうとしている……もう見えない、見えないんだよっ。

私は今どうしたらいいのか。何もできない、何も……誰か私に喝を入れてほしい。生命体じゃなくなっていく私の体と心に。

一月二十三日（月）

裕也さんからの返事が一週間に一回しか来なくなった。これまでの頻度はなんだったのかな。あの頃はお互い今やっていることが手に着かないくらい、メールを着信する音が響き渡った。三日で、メールボックスが一杯になった。彼の古いメールが消えていくのが怖くて、私はノートに書き写した。お気に入りのメールはパソコンで打ってプリントアウトした。

メールが一切こない。彼のページの掲示板もそのせいか書き込みしにくい。もしそれも無視されたら私はきつと死ぬしかないから。

でもやっぱり気になるから毎日彼の日記は見に行くようにしている。日記には彼女のことを書いてなかったけど、『桜』たちがいなくなつて復活した掲示板での裕也さんは今までは比喩物にならないくらい明るい。それに、掲示板にはお水の彼女が来ていた。彼女はみんなになじんで楽しくチャットをしていた。荒らしが無くなって彼のサイトに戻ってきたみんなは彼女を当然の事のように受け入れた。そう、どんな人でも受け入れるのが彼と、彼のページのスタンスなのだから。

そういえば彼はどんな中傷の書き込みにも他の管理人がするようにな、警察に訴えるとか罵詈雑言を吐いたりせずに、丁寧に対応していた。私は過去にそれを甘いと感じて彼に聞くと、「だって純粋な批判かもしれないから」と大人びた答えが返ってきた。

私はそんな所を愛したんだ。柔軟な考え方を持っている彼を。そして繊細で魅力的な暗い瞳を持った彼を。この恋は大変かもしれないということとは、彼の性格を知った時点で理解するべきだったんだ。

なんだか置いていかれたような気持ちだ。  
行かないで、行かないで！裕也さん……。

一月二十四日（火）

さつきよりは気分が落ち着いてきたのでこれを書いている。

（ここには何度も書いたり消したりした汚い空白が広がっている）

気づいたんだ。本当に苦しい時は何も書けないって。文章にすればすつきりするって思っていたけど。

実際はそっじゃないんだ。書くことによって「形」として残ってしまうから余計に忘れられなくなるだけ。

日記は悲しい。自分で答えを出さなくてはならないから。誰も助けてくれない、聞いてくれない。洞窟に迷い込んだ人が泣き叫ぶんだけど帰ってくるのは自分の声のこだまだけ……それを聞くと余計にやりきれなくなるのと似てる。

なんのために私は「書く」のだろう。これまで書くことだけを心の糧にしていたのに。

一月二十八日（土）

今日で最後のメール受信から十日がたった。まだ彼からの返事は届いていない。最近話題が無くなりつつあったしもうメール交換を続けることは元々限界だったのかも。メールアドレスは変わっていないみたいだし、もちろん「なんで返事くれないの？」って聞くことは出来る。

できる、けどそれは死んでも出来ない。私のプライドまで傷つけられることに、私は耐えられるだろうか。

彼はたまたま返事するのを忘れてるんだ。出したつもりになっているだけ。

そう思うことが私にとって一番楽。自分からは口が裂けても聞けない。裕也さん……。

……私はメル友としてもあなたに捨てられたんですか？

一月三十日（月）

学校の帰り、久しぶりに本屋に寄ってみた。そう、こんな時でも朝はやってくるんだ。私はまたいびられるためだけに学校に行かなくてはならなかった。立ち読みだけにするつもりだったけど気になる漫画があったから、ついつい買ってしまった。「この世は愛がすべて」みたいな少女漫画が増えて嫌気がさしていたから、今日見つけたコミックスはすごく貴重だと思っ。

テーマは現代っ子の闇。不登校、人間関係の悩み……いろんな境遇の女の子が主人公。

もしかしたらこの中に「私」がいるかもしれない。そう思ってもさぼり読んだ。

でも、私はいなかったんだよね。この話の主人公達はそれぞれ悩みをかかえてる。いじめられてるとか、援助交際しているとか……そういう様々な理由でやさぐれていく。

私はそうじゃない。どんなに満たされていても何かが足りないのだ。悲しくないけど心にぽっかり穴があいた感じ。小さい子が指を加えている映像がなぜかまぶたの裏に浮かぶ。

足りないものが、分らない。愛情か？それだけは違う。絶対、違う！違う違う違う、違うの！

そんなものがなくても人間死にはしない。ただ寂しいだけ。

それだけの話。それだけの。

一月三十一日（火）

もし大好きな人と仮に結ばれたとしてもしばらくしたらお互い分り合えなくて別れてしまふかもしれない。あるいは不可抗力的にやってきた死がいつの日か二人を分かつだろう。

ましてやその恋が独りよがりなものだったら？

生きてその思いに気づいてもらえないなら、死んで分かってもらった方が幸せだと思えるんだ。そうしか思えない。こんな考え方、病んでるだろうか。

死を恋における武器にするのは卑怯かもしれない。ただ……私はこの年齢にもかかわらず裕也さんを愛しすぎてしまった。バカみたいつて思われるだろうか。

恋なんてふんわりとして楽しいものと以前までは想像していた。少なくとも、マンガではそう描かれていたし、確かにその恩恵を私も多少は受けることはできた。でもその後待っていたのは身を焦がすほどのやるせなさや悔しさ、嫉妬、そして心を刺す悲しみ。これまで、誰も教えてくれなかった。恋がこれほどの副作用を持っているのだとは。失恋なんて、そんな、かわいいレベルじゃない！恋を失う……私も失えたらいいのに！苦しい。辛いよ。

死ねば、という声の心の中で響いた。

二月一日（水）

あの日、裕也さんとはじめてメールを交わしたときの喜びを忘れない。彼に恋いこがれるなんて思っても見なかったあの日。顔も知らないし限りなく遠くにいた彼。そんな距離でも、少なくとも今よりは近い場所にいたんだ。

私の幼い恋心はふくらみ、いつも淡い思いで満たされるようになった。秘めた思いは彼には気づかれなかったが、接しているだけで幸せだった。

それが急激に大きくなり始めたのが、彼が本当に手に触れられる位置に来た日。私の感情は爆発しそうだった。今も覚えている。カラオケの時、みんなでマイクの取り合いをしていて触れた指の柔らかさを。少なくともメールだけの関係だった時よりは私たちの間は進展した。

そして気持ちが最高潮に上り詰めたのが二回目に会えたあの日。彼の手を握り、街を歩いた。気持ちを通じ合ったと確信した。私は本当に誇らしげだった。今思つと彼は私の保護者として手を握っていたのかもしれない。

死んでもいい、と心から誓った。

それから私たちの、いや私のグラフは一度と上がる事はなかった。奪い去られたのは彼だけではない。私の気持ちも。私の心は全て彼に捧げられていたから。それが報われないと知つた今、私は……。

どうやら、最高の時にした誓いを今実現させる事になるようだ。

こんな最低の時に。

ねえ、なんでこんな事になってしまったのかな。昨日、一日中暗いふとんの中で考えたんだ。

あの時、ちゃんとぶつかつておけば良かったんだ。瞳と瞳が合わさつたあの瞬間に。たぶん結果は同じだったろう。彼は不実な事を、最も嫌う人だ。そして私は泣いただろう。でもその悲しみは一時的なものですんだはずだ。身を引き裂くような悲しみは。

今の私はどう？ 幸せにひたる彼を横目に、心にもない言葉を出す。おめでとう。私は思いを口に出すことも許されない（だって彼の幸せを白けさせたくなかった）。

この苦しみはいつになったら終わるの？ もう長い間苦しみすぎた。これは傷つくことを恐れて逃げた私への天罰だ。逃げることはやっぱり悪かつたの？ 逃げることは、あなたが教えてくれたはずなのに！ 嘘つき！ うそつきいい！

何も考えたくない。苦しみ、私はあんと一緒に自分も殺す。生きてる限りこの辛苦は私一人で背負わされるんだね。

二月三日（木）

いつか父が言っていた。

自殺する人は一種の病気のようなもので彼らはしょーどーてきに死に急ぐ。

うそつき！ しょうどうてきなんかじゃない。悩んで悩んで死を選んだんだ。それしか方法がなかったんだ。

そこで、長い長い日記は終わっていた。裕也は後ろの背もたれにもたれかかった。これまでずっと背すじをまっすぐにして読んでいたのだ。

その途端、これまで目尻にたまっていた涙がつつとこぼれ落ちた。涙は彼の服にしみを作った。十年二ヶ月と八日ぶりの涙だった。

「いけない、ノートを汚してしまう」  
そう言った瞬間彼は頬に手をあてた。

泣くことができたのか、自分にも。人間になれたんだ。泣くことを許されていたのか。彼はそれ以外のことを思考するのが怖かった。もつとも考えるべき怖ろしい事を考えることから逃げていた。

彼はまだノートに何か紙が挟まっている事に気づいた。小さな便せんだった。最後まで読まなければならない。それが誓いなのだから。

美嘉へ。

最後に願いがありません。聞いてください。私は死ぬ。誰のせいでもない、自分の罪のせい。この死はぎんげの代わりなのです。

もう時間がない。裕也さんの話、この前したでしょ？好きなメル友の話。その人に、京都に来てほしい。裏に彼の携帯の番号を書いておくから、彼を連れてきて。そして、私の話をして。私という人間が存在したということ、彼に伝えて……。お願い。これまででありがと。私みたいな人間うざいだけだったでしょ？

神戸、という車内アナウンスが流れた。裕也はむんずとノートと切符を掴むと勢いよく立ち上がった。ホームに降り立つとそのまますんずん歩みを進める。

改札口を出ると彼は走り出した。またしとすと雨が降っていた。雨が頬べったりとぬらし、流れていく。冷たい夜の風が吹いた。空には冷たさと共鳴して無数のまばゆい光があった。それを見つめた瞬間、先ほどまで避けていた考えが煌めいた。

「これは……遺書か。俺のせいなのか？」  
手が震えてくるのを感じた。彼はそれを振り切るようにひたすら駆け続けた、闇の中を。

「俺はナナとネットを通じて知り合っただけだ、それだけだ」  
毎日生きている意味も分からなくて、落ちていく自分。そんな駄目な自分が、これからまだまだ未来のある少女を殺してしまったのか？

健康だったナナを、「こちら側」に引き込んでしまったのか？

彼には見えた。

ナナの孤独な後ろ姿が。自分が理恵と繋がっている間に人間として耐え難い責め苦を背負っている姿が。でも、彼女は泣いてはいなかった。これから楽になれるのだから。これまでリストカットに使ってきたカミソリをそっと手首にあてる……暗い浴室で。紺色のブルーに、温かいシャワーと生暖かい優しい血が容赦なく降り注ぐ。

違うだろう、ナナ。君は人間関係で悩んでいた、そうだろう。

“裕也さん……” 何かが内側から自分をむしばむを感じる。何かが俺の領域を犯している。

「苦しい、誰か」

“裕也さん、私ね” それは罪悪感という言葉では陳腐に聞こえるほどの切り裂くような罪の意識だった。

俺は人殺しだ！

あの子を死の瞬間まで悩み苦しませ、地獄を見せて殺したんだ。

“あなたと心が通じ合わなかったから……” どうして分からなかったんだ。自分の幸せにだけ心を向けていた。俺は理恵と出会えた事が嬉しくて、すっかり周りが消え失せていた。携帯も見ようとはしなかった。

“だから、私考えたの……” だって、携帯なんて俺はネットでの友達とのメール交換にしか使わなかった。どうせ返事を返さなくてもあいつらは生きていけると思っていたから。

“あなたの心に入り込めば” もう、生きていくのが嫌だ。俺はこれまで人の心を傷つける奴が大嫌いだ。そう、それは俺だよ俺。善人の仮面をかぶり、人の相談にのっては当たり前障りのないアドバイスをする。それで人を傷つける。この偽善者がっ！この俺が、一番人を傷つけているんじゃないか！

“一つになれるんじゃないかって……” 偽物の愛？肉体的な愛を選んだが故に、プラトニックな愛情を殺したんだ。こんな言い方は言い過ぎか？でも肉体の快楽はしばし繊細精神を愚鈍にさせるのだ。俺を一番愛してくれたのは理恵じゃない、ナナだったんだ！透明な、汚れないナナだった。

裕也はその場に座り込んだ。裏路地に、雨は容赦なく降り続ける。

（でも俺はそれでは生きていけないんだ。精神的な愛は感じるのが難しい。ああ、今更何を言っているんだ俺は。もう、全てが終わってしまったんだ。愛は壊れた。そして人が死んだ。遅すぎたんだ。）

一つだけ言えることがある。それは……ナナ、君への罪のつくないをしなくてはいけないということだ。



昨日までの裕也だったら、凍った心でこの事態を見つめただろう。一瞬悲しいと思っただけで、事実は通りすぎていっただろう。

でも今この日記と遺書を見て、彼の心は変わってしまった。いや、見たんじゃない。追体験したんだ。少しだけでも、泣くことができたんだ。真実は彼の心を刺した。

（ナナ、君が恨んで死んでいったのではないとは分かる。だからこそ、“人間”に戻った俺は引き裂かれる……どうせなら、恨んでくれ、呪ってくれ）

裕也は頭をかかえ、何かと戦った。機械のままの方が良かった。何も感じず、麻痺しているだけで良かったのだ。この罪を背負わずにすむから。でも、それももう遅いのだ。

（ナナ、君が苦しんで死んでいったのなら、自分ももっと苦しんで死んでいこう。それしか贖罪への道は残されていないんだ）

「雨……」  
もつと降れ。そして熱を奪うんだ。生きているという証を。

せまい裏路地に雨はますます強く降り注いだ。そしてそこにいる男の肌を突き刺した。

あれからもう三時間もたっている。男は立ちつくしたまま身じろぎもしなかった。ただ、不穏な雲を見つめているだけだった。それはおぞましい光景だったが、絵になっていた。

突然、男はぶるぶると震えだした。寒いのだろうか。その時、男の唇が誰にも聞き取れない言葉を絞り出した。

「あと、少し……」  
衰弱しているのか、目はうつろでしだいに焦点を失い始めた。やがて路地の壁にもたりかかれ、崩れ落ちた。まるで最後の力を振り絞るかのようになり、男、よく見るとそれは若い青年だった……は、きつと顔をあげた。

「愛に一番無縁だった俺が……」  
そうあえぐと青年は首を横に垂れた。

「それに殺されるとはな……」  
コンクリートの冷たい体からのぞいた青年の表情は、雨に濡れて空の星のようにきらきらと光っていた。目を閉じたその顔は、この世になんの不満足もないというような、安らかな微笑を浮かべていた。

裕也の心が欲しくて死んだ宮下奈々の自宅の近くには、小さな公園がある。昼間は子供達がはしゃいでいるがすでに辺りは暗くなっていてほとんど誰の姿も見えない。しーんという音でうるさいほどだった。

箱形ブランコをこぐ音以外は。

そう、キィ、キィという規則的な音とそれに乗っている少女たちの話し声以外は何も聞こえない。

「満足だった？」

そう尋ねた右側に乗っている少女のさらさらと揺れる影はロングヘアのせいだろう。反対側に座っているもう一人の少女は小さくうなずいた。

「うん……」

最初に言葉を発した長い髪の少女は大きいため息をついた。彼女は立ち上がるとブランコを強くこいで叫ぶようにいった。

「ナナ、あんたほんとバカだよ。こんな不毛なこと考えるなんて」

目を開けると、あまりの眩しさに目がくらんだ。ぼんやりとしていた視界が次第にはつきりとしていく。ぶれていた被写体が一本の線になる。

「……」

「ユウ！」

青年は覚醒した。どこもかしこも白い、白すぎる、清浄な病室で。

「先生！ユウが気がつきました！」

青年の手を取ると女は涙を流した。彼女は異様に濃い化粧をしていた。そして服装もこの空間には不謹慎なものを着ていた。だが、その態度はここにいる人々の中でもっとも相応しかった。

「もう、一週間近く眠っていたのよ。良かった、ほんとに」

女の歡喜をよそに、青年は呆然としていた。自分がなぜここにいるのか分からないのだろうか。

青年は話そうとしたが、酸素吸入器が邪魔でうまく言葉を発することができなかった。すかさず彼女がそれをとってやると彼は自分の両手の平を見つめてつぶやいた。

「い、きている……？」

女はオーバリアクションで首を縦に振った。

「うん、そうよ。不思議よね……いつもは何も感じないのに、生きてるってことが、こんなに嬉しいなんて……」

「ユウ、聞いてほしいことがあるの」

青年は病室の白い壁についた小さな黒いシミを凝視していた。

「私の所から出て行った時、俺みたいな駄目人間を見下してるのかって叫んだよね。私、ショックだったな、あの言葉」

女も壁のシミを見つめた。だがそれは青年が見ているものとは違う所だった。彼女は青年の見つめているシミがじわじわと広がってきていることに気づいていなかった。

「あれから私、考えたの。あなたをなんで家に入れたのかって。見下すためじゃないかっていうのは最初から分かってたわ。じゃあどうして？この答えが出るのにすごく時間がかかった。答えが出たとしてもあなたはどこに行ったのかもわからないし」

彼女は青年の肩に手を回してそっと抱きしめた。

「ユウを見てるとなぜか癒されるの。私、これまでずっとメールレディとかお水やってきて、それが染みついちゃって。自分は汚れた人間だっていつも思ってたわ。毎日がパサパサしてて。でもやめられなかった。私なんて接客だけで他に才能の無い人間に、他に働く所なんてないもの。っていうのは言い訳で、本当はおもしろかったのよね。男がこっちにかしずいて、お願いしてくるのが。あいつらはバカだわ」

青年は相変わらず女がいないかのようにずっと同じ所を見ていた。「それにあんな割のいい仕事なんて他にないと思っただから。でもね、ユウと会ってから何かが変わったの。始めて人間に会えた気がしたの。毎日が楽しくて潤いに満ちてた。ユウっていつも暗い目してるじゃん？それに吸い込まれそうになるのが自分にも分かったわ」

そう言って女は窓の外を見つめた。ちぎった綿のような雲まじりの青い空が広がっていた。

「目もそうだけど、私が一番惹かれたのはその繊細さかな。仕事で男の嫌な面いっぱい見させられた分、ユウの心の優しさがいつも支えになった。ユウが何かに傷ついているっていうのは分かってたし、それをあえて覗くことはしなかったけど、深いトラウマがあるのは分かったわ」

そこまで話すと女は我に返った。

「あ、ごめん、病み上がりなのに長話して……。もう終わるから」

「佐々木さん、今ご両親がいらっしゃるわ」

看護婦がその部屋の外から伝えると、女は急に早口になって言った。どうやら両親には聞かれたくない内容のようだ。

「私、あなたのこと愛しているかって言われたら今も分からない。でもこれだけは言える。ユウの役に立ちたいの。あなたが好きだから。これからもずっと一緒にいたいわ、あのアパートで。別に毎日働かなくなたっていい。ただ傍にいてくれるだけでいいの。傍に……」  
病室の廊下からコツコツという足音が聞こえてきた。話し声も一緒に近づいてきた。

「裕也は今どうしてるんですか？」

「面会人の方と話をされています」

「どうやら青年の両親がやってきたらしい。」

「まだ気がつかれたばかりなんで、興奮させないようにお願いします」

看護婦がそう言つて扉をあけると、両親はベッドの所まで一目散にかけよつた。彼らは女を突き飛ばすと

「裕也！なんであんな所に！」

「おまえがいなくなつてからどれだけ迷惑被つたと思つてるんだ」

彼らはふと女の方を見ると慙懃無礼に言つた。

「あなたは誰ですか？」

女は心外だという風に堂々と胸をはつていった。

「ユウはずつと私の家にいたんです」

「泊めて頂いたのは本当にお世話になつたと思つています。しかし失礼ですが裕也にあなたのような人とお付き合ひをしてほしいとは思いません。この場はどうぞお引き取り下さい」

「なんだつて？」

女はヒステリックにベッドの横のテーブルをドンと強く叩くと放心状態の青年の方を向いていった。

「ね、ユウ言つてたじゃない。あんな親から逃げたいつて。ね、そうでしょユウ。ずつと私と一緒にいるんだよね」

青年の目は相変わらず空虚だつた。

「ね、そうでしょ？はつきりしてよ」

が、まもなく閉じられた唇が震えて言葉を紡ぎ出す。

「なんで……どう、して」

病室中が彼の一拳一動に注目していた。

「なんで生きているんだ俺は……」

彼の手はがたがたと震えていた。頬はさきに増して青くなり、汗が流れ落ちた。病室の空気は一瞬にして凍り付いた。

青年の父は嫌な予感がした。これと同じような状態を何度か見たことがある。どこだつただろうか。必死で思い出そうとするが、まるで自分自身が思い出すのを拒んでいるように思えた。そういう所だけがこの父子の似ている所だつた。

「ユウ、どうしてそんなこと言つて、私は嬉しかったわ」

あなたが生きていてくれて。そう女が言い切る寸前、青年は異様なほどの俊敏さでベッドから飛び降り、白い壁に自分の体を力一杯たたきつけた。まるで自身を破壊せんばかりの勢いで。何度も、何度も。その動きはプログラムされた機械と見まごうほどであった。

「ゆ、裕也？一体……」

青年の母親は戸惑い、なすすべを失つた。彼女には青年の全てが理解できなかった。彼女は精神の衝撃のあまり手の感覚が無くなり、持っていたバッグが床へと滑り落ちた事にも気がつかなかった。しゅるり、という音とドン、ドンという規則的な音だけが病室に響き渡る。

一方派手な女は青年の破壊行動を必死で止めようとしていた。女

は青年を羽交い締めにながらヒステリックに叫んだ。

「やめて！やめて頼むから！お願い、ねえ、やめて！」

しかし華奢といえども男の力である。青年は女の手を手加減無しで振り切ると病室を出て、猛スピードで廊下を走り抜けていった。女は突き飛ばされ、地面に伏した。彼女の両の目からは涙が静かにこぼれていた。なぜか。それは目を見て青年が正気を失っていることを知ってしまったからである。彼の目からは以前までの優しさ、繊細さは全く読みとれなかった。優しかったユウは死んでしまった……ただそこには虚無という名の狂気が宿るばかりであったのだ。

その頃の青年は動物的な叫声をあげて廊下を駆け回っていた。これまで奥に引つ込めていた苦しみが爆発していた。彼自身にはコントロールすることは不可能だった。なぜならもう彼自身が消えてしまったから。

「わあああーあああああ！」

これまで二十数年分の怒り、やるせなさ、悔しさ。それらが絡み合い、お互いの力を増幅し、彼の心という器からこぼれる。器が空になってもそれは終わらない。また感情が作られる。そして溢れ続け、それは器が朽ちるまで終わることを知らない。彼の心は膿んでいた。その膿を吐き出すまで、彼は許されぬのだ……。彼の目は涙を流していた。それは、彼の今の状態と悲しいくらいに対比して美しかった。

「先生！こつちです」

先ほどの看護師が担当医を連れてやってきた。医者は転がりながら暴れ続ける彼を押さえつけて叫んだ。

「どうしたんだ！」

もう、彼は外界からの声を全く受け付けなくなっていた。彼はかねてから望んでいたことを達成したのだ。自分の全てを封鎖してしまいたいという願いを。そう、あの哀しい台詞。

「完全に狂うことができてしまったら、楽だろうな」

喧噪の中、青年の父はある記憶と自分の息子が重なるのが見えた。それは自分の担当していたおとなしい一見正常な患者が突然、糸が切れたみたいに発狂したあの映像だった。

その患者が発狂した日は、裕也の6歳の誕生日だった。まだ新米の精神科医だった父は、その夜家に帰れなかった。翌朝やっと帰宅したが、完全にその事を忘れていた彼の手には仕事の資料の入ったかばんしか握られていなかった。リビングのソファーに横になって目をつぶろうとすると、裕也がそばでじっと自分の事を見つめていた。何も言おうとはしなかった。父はうるんだ目でじろじろ見られるのがうっとおしくて、お姉ちゃんの所に行け、と軽くあしらった。

そう、あれは裕也の六回目の誕生日だったのだ。その息子が十七年

後、あの患者のようになってここに転がっている。

父はあぜんとしてその光景を眺めていた。そして、こう呟いた。  
「これが、私が患者達のためにしてきた全ての事の代償なのか」

ナナの表情は暗くて見えない。ロングヘアーの少女はまだ気持ち  
が収まらないらしく、さらに話し続ける。

「こんなことするのって陰険だよ！本当は死んでもいないのに、自  
殺したと言われて、しかもその原因が自分だって知ったら、誰だっ  
て……」

ナナは地面と水平になるくらい顔を伏せていた。

「そうかな」

「そうだよ！」

長い髪の少女、いや美嘉は自分のひざを打つとまくしたてた。

「ナナがどうしてもしてほしいって泣きつくから、こんな役目引き  
受けたけど、やらなきゃ良かった！第一あの墓とか苗字が一緒って  
だけじゃない。それに、もう二度とあの人には会えないんだよ。ナ  
ナは死んでしまったことになってるんだから！」

いつもはナナが興奮し、美嘉が冷静にいさめるというスタイルだっ  
たが、今日の二人はいつもと逆だった。

「それでもいいの。もう会えなくても」

「なんで？おかしいよそんなの。納得できない！」

美嘉は怒り疲れたらしく、はあと息をついた。

「私たちはもう会わない方がいいの。何度会ってももう恋人同士に  
はなれないって気づいたんだ」

「それは彼に恋人がいるから？そんなのすぐに別れちゃうかもしれ  
ないじゃない」

どうやら美嘉の憤怒は少しは収まったようだ。先ほどのような怒声  
はもうあげない。

「裕也さんに彼女がいるかどうかなんて、関係ないって分かったん  
だ」

「分かんない、分かんないよ。ナナ……」

「最初はね、ただ私は裕也さんに自分の命捧げてもいいくらいに  
思ってたこの気持ちを知ってほしかったんだ。でも所詮私はメル友  
だし妹扱い。私が死んだって言ったら気持ち気づいてもらえると  
思ってた……日記見せて罪悪感感じさせてさ」

ナナは力無く肩を落とした。美嘉も視線を地面に落とした。

「そしたらナナの方を向いてもらえるんじゃないかってやつ？死は  
恋の武器っていうもんね」

「私もさ、最初はそういうの期待してた。でも何かが違った。本  
音を言うと裕也さんをそろそろ乗り越えたかった……これは儀式な

の」

美嘉は頭をかかえてつぶやいた。

「ごめん、分かりかけたつもりがますます分からなくなってきてんだけど」

「分からなくてもいいよ。私自身混乱してて何が言いたいのか。でも今日の裕也さん、駅の影から見てすごい感じた事があるの。なんであんな無気力な人に吸い込まれてたんだろって」

カナはここからは美嘉にもほとんど聞こえないような小声で言った。私はずっと裕也さんみたいになりたいって思ってた。そして彼に激しく恋してた。あんな人がこの世を浄化してくれるって。でも彼は実際この世の中で何一つとして適応してない……いや、適応しようともしてない。

社会に適応してないのが悪いって言いたいんじゃない。でも彼だけ「世界」とは違うような気がする。世界が彼を避けて通っているようになって言ったら変かな。

彼女がそこまで言い終わると美嘉はあー、なるほどねと相槌を打った。

「分かるかもそれ。あの人一回たりとも私と目、合わせようとしなかったから。そうだね、世界が彼を避けてるっていうよりさ、彼が全てを拒否してるんだよ。何もかも受信するのを」

「そんな所に惹かれてただけだね。あの憂いのただよった雰囲気に。一時は裕也さんのために死んでもいいか思ってた。でも私はこの世界を捨てられない。まだ希望を心に残してるからさ、なんだかんだ言っても」

美嘉は白い息をくるくる手であやつっていた。

「でもさ、やっぱり私割り切れないよ。今あの人きつと苦しんでるに決まってる。私も頼まれたとはいえそれに一役かったからさあ、なんていうか、罪悪感感じてる」

カナはふっと粉雪のような微笑をうかべた。

「裕也さんのことなら、心配ない。私が一番よく知ってるから」  
彼は一瞬だけなら罪悪感らしきものを感じて苦しむよきつと。でももう次の瞬間には私の存在すら忘れてまた街に出るから……。彼の心は薄いガラスでできてる。透明すぎてもう何もかも通り過ぎていつてしまう。私の存在も……。

でもね、彼の心に小さな傷は残ったと思うんだ。本人がなんのことも忘れても。それを刻みつけたかった。彼が死ぬまでその傷は残り続ける。偽りの恋人同士になるよりはずっといいに決まってる……それだけで私は本望だよ。

「私は今も彼の事が好きだよ。いつもあの人の事思ってる。この思いが叶わなくても……」

ナナは手袋で目尻の涙をそつとぬぐった。涙は寒さで凍り付いたように思えた。裕也さん、ありがとう…。ナナははじめて上をむいた。そこには慎ましやかに光る数個の星が見えた。もうあの時覚えておこうと誓った星は見つからない。見つけても、ナナにはきつと分らないだろう。でも、あの時のあの星は消えたわけじゃないし、永遠に輝きを保ち続ける。それでいいんだよね。見つからないからこそ美しいものなんだ。さようなら、輝く星。私はもうあなたも、他の星も探さない。星は美しすぎるから。

「私の書いた“シナリオ”通り演技してくれてありがとう。大好きだよ、美嘉」

美嘉はえへへ、とその涼しげな目をほころばせた。

「大根役者でごめんね。あ、そうだシナリオで思い出したけど今度のコンクール、うちの演劇部はまた手作りの脚本作って演じるつもりなんだけど、書き手がいなくてさ。ナナに書いてもらえないかな、例年通り」

美嘉は入学してからずっと演劇部に入っている。美嘉は誰よりもよく通る声をしていて、他の誰よりも演じることがうまかった。内気な彼女が舞台に立てるわけ無いって？それは違う。彼女はその舞台で自分自身を演じているのだ。内気さから来る鬱屈を昇華しながら……。一方カナは正式な部員では無かったが書くことが好きなので毎年コンクールの脚本作りだけは手伝っていた。

「ごめんね、その話断らなくちゃ駄目みたい」

「なんで？ナナがやってくれるって、私もう他の子に伝えちゃったのに」

美嘉は不満で口先をとんがらせた。顔がクシャツとなった。が、もうその顔はさっきのように怒ってはいなかった。彼女は変な顔をしてナナの痛みの麻酔代わりになろうとした。今更こんな方法で元気づけようとするなんて我ながら古典的だな、とあきれながら。その表情がおもしろくてナナは一度笑ったがすぐに真面目な顔つきに戻って言った。真摯な目をしていた。先ほどまでの憂いをかなぐり捨て、その目は澄み切っていた。

「もう人を操りたくないの」

彼女はそこらじゅうの空気を、実際は無いはずの脚本に見立てて丸め、草むらに放り投げる。空気はまるで紙のようにくしゃくしゃになった。

「今日上演されたのが、私の最後の脚本」

これまでで最低のできだけど最悪ではない、私の大事なシナリオ。



---

『最後の脚本』 十子著

sakka.org